# JAPRS

*JAN.2016 No.1*

新春号

一般社団法人　日本音楽スタジオ協会

# 目　次


会長年頭挨拶 1

2015年JAPRS企業説明会レポート 2

スタジオ見学会レポート 4

8. 青葉台スタジオ 4

9. スタジオグリーンバード 6

10. マルニスタジオ 8

第16回JAPRS新プロ・エンジニア養成セミナーレポート 10

平成27年度通常総会＆懇親会レポート 11

第14回JAPRS認定「サウンドレコーディング技術認定試験」実施報告 12

レコーディング勉強会レポート 13

beBlue AOYAMA Dolby Atmosセミナーレポート 17

第12回JAPRS認定「Pro Tools技術認定試験」実施報告 43

AESジャパンコンファレンス・名古屋2015
3Dオーディオの可能性/ワークショップレポート 44

第27回JAPRSゴルフコンペ 47

Inter BEE 2015 賛助会員社ブースツアーレポート 48

第22回日本プロ音楽録音賞授賞式レポート 50

第22回日本プロ音楽録音賞 審査委員講評 61

「音の日のつどいパーティー」レポート 72

会員動向 74

# 会長年頭挨拶

(一社) 日本音楽スタジオ協会
会長　内 沼　映 二

明けましておめでとうございます。
日本音楽スタジオ協会を代表し、謹んで新春のご挨拶を申し上げます。

当協会は平成２年に社団法人化して以来、本年で設立27年目を迎えることとなりました。
これも偏に皆様のご支援、ご鞭撻の賜と厚く御礼申し上げます。

昨年も、この数年におけるハイレゾ音源の台頭について述べさせていただきましたが、既にハイレゾリューション・フォーマットによる録音は日常的に行われており、SACD、Blu-ray 等のパッケージ商品を含め、配信分野におけるノンパッケージによるユーザーに対する発信は 2ch ステレオに加え、サラウンドによる配信も徐々に活性化しています。
また、このようなハイレゾリューション・フォーマットによる音源制作の現状は、ミュージシャンに対しても、良い意味での影響があり、音源制作に対するアーティストの感性に刺激を与えていることが感じられます。
このような時代を迎えている当協会は、従来にも増して「音の匠」という集団として、更に良質な音源の発信に努める所存です。

本年も、皆様のご支援、ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

# 2015年 JAPRS 企業説明会レポート

平成 27 年 5 月 16 日（土）、レコーディングスタジオへの就職を目指して専門学校に在籍する学生を対象とした合同企業説明会が専門学校ＥＳＰミュージカルアカデミーで開催されました。この催しも今回で 15 回目となり、JAPRS の公式行事として定着している。

受付

参加学生は、仙台、名古屋、大阪からの学生を含めて 96 名が参加。また、出展側からは、正会員スタジオ 5 社と準会員スタジオ 1 社および賛助会員 2 社から 15 名の参加により実施された。

定刻 13 時より同校の 12 号館地下 2 階 Club 1ne 2wo にて参加者全員が集い、吉田保専門学校委員会委員長より挨拶の後、引き続いて、参加企業各社が自社の概要を紹介。

専門学校委員会
吉田委員長

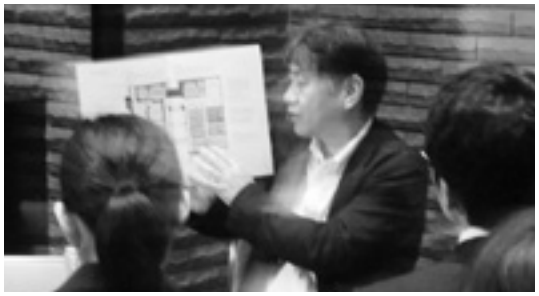
その後、二部がスタート。今回は一回あたりの説明時間を 30 分とし、前半の 3 回は協会で指定した出展ブースの説明を受け、15 分の休憩後、後半の 2 回は各自が希望するブースでの説明を受ける方法で実施した。

リクルートスーツに身を固めた熱心な学生たちが説明に耳を傾け、メモを取り、質問をする光景が見られました。

予定時刻の 15 時に 5 回目の説明が無事に終わり、企業説明会が終了。

報告の最後に、ご出展いただいた企業の皆様に心より感謝申し上げます。

（株）エムアイティギャザリング



（株）サウンドインスタジオ

（株）サウンド・シティ

（株）バーディハウス

（株）ミキサーズラボ

（株）丸仁商会

オタリテック（株）

（株）サンフォニックス

出展企業は以下のとおり・・・

| | | |
|---|---|---|
| （株）エムアイティギャザリング | 代表取締役 | 横山　　武 |
| | レコーディングエンジニア | 加藤　智明 |
| （株）サウンドインスタジオ | 技術部長 | |
| | レコーディングエンジニア | 浜田　純伸 |
| （株）サウンド・シティ | 営業部部長 | 明地　　権 |
| | オーディオ技術部 部長 | 中澤　　智 |
| （株）バーディハウス | ABS RECORDING Booking | 伊藤　　敦 |
| | エンジニア | 島田枝里花 |
| （株）ミキサーズラボ | 統括次長兼 | |
| | 企画開発室室長 | 中村　隆一 |
| | 営業部 | 鐘ヶ江　宝 |
| （株）丸二商会 | スタジオマネージャー | 内藤　重利 |
| オタリテック（株） | 専務取締役 | 西原　　聡 |
| | 営業部 部長 | 砂田　陽一 |
| | 技術部長 | 中村　朋博 |
| （株）サンフォニックス | 総務部課長 | 西尾　靖彦 |
| | 販売事業本部課長 | 森　　弘二 |

# スタジオ見学会レポート
# ８．青葉台スタジオ

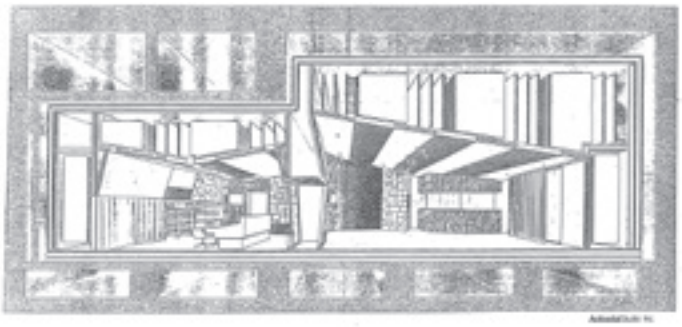
ESP Musical Academy
井良沢 元治

中目黒、山手通りドンキホーテの近所に青葉台スタジオがあります。古い話しですが、目黒川が氾濫し地下まで水は来たが、スタジオは防音ドアで大丈夫だった！ここまで浸かったんだよ！壁のシミを指差して話してくれた、KRS スタジオチーフエンジニア大野進氏を、思い出しながら、見学に臨みました。

スタジオの歴史的に、竹中工務店・若林音響施工・トム・ヒドレー音響デザインという何も問題ないメンバーで構築されたスタジオです。（トム・ヒドレー＝フリーダム・六本木ソニー・信濃町ソニー・SEDIC　etc. の音響デザイナー）

KRS スタジオとして、1979 年にスタートし、1989 年改修工事後、青葉台スタジオとして、リスタートしました。

断面図を見て解るように、スタジオとして柱の無い設計、頑丈な構造が良くわかります。トラップの量も多く、長さも長いもので２m70cm もあったそうです。図Ⅰ参照



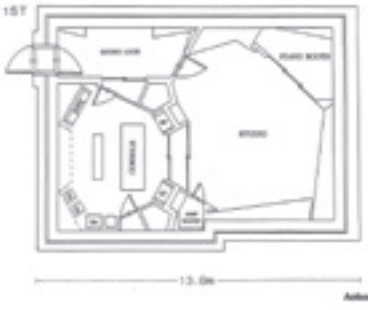
図Ⅰ

スタジオ全体の容積は、大きくもなく小さくもない、使い勝手の良いサイズで、アコースティックピアノは改修後アイソレーションしていました。

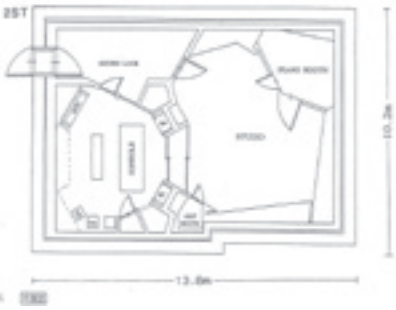
床も改修後にフローリングにしました、個人的には改修前のシャギー絨毯の時、録音したドラムサウンドを聞きたかったです。

Studio1（1F）、Studio2（B1F）はともにほぼ同じレイアウトで合計２箱あり、この同じ形状のスタジオがあることは使い勝手がとても良いと感じます。

Studio1（1F）、Studio2（B1F）のサウンドキャラクターの違いもあまり無いそうで EQUIPMENT LIST を見てもらえばわかります。　図Ⅱ・Ⅲ参照



図Ⅱ



図Ⅲ

ラージスピーカーは　泣く子も黙る　REY AUDIO RM-6V　スタジオ見学会後半でハイレゾ試聴会において各フォーマット収録した曲の比較試聴
①48kHz/16bit　②96kHz/24bit　③192kHz/24bit の時にあらためてサウンドの違いのわかる鳴りをしていました。

幾つかの老舗と呼ばれるスタジオを見学し毎回感じるのが、素晴らしいサウンドとアルバムを生み出して来た、スタジオの歴史・空気・時間が、私に問いかけてくる思いでいっぱいです。
レコーディングスタジオを０から建築出来る、パワー感がすごくうらやましいです。
自宅にDAW（ダウ）の、プライベートスタジオを構築し外部クロックはコレだと論議している自分達はこれで良いのかと考えさせられます。

最後に、青葉台スタジオ･清水三義氏、株式会社 若林音響・若林哲朗氏等、大先輩方の説明ありがとうございました。
余談ですが、スタジオ見学説明の中でビル・パトナム / トム・ヒドレーの名前が出てきたので、若人は研究してみても良い人だと思います。

(株)青葉台スタジオ･清水 三義 氏

（株）若林音響・若林 哲朗 氏

「参考ホームページ」
青葉台スタジオ
http://www.aobadaistudio.co.jp/index.html

株式会社　若林音響
http://www.wtech.co.jp/

TTG スタジオ　トム・ヒドレー
https://ja.wikipedia.org/wiki/TTG%E3%82%B9%E3%82%BF%E3%82%B8%E3%82%AA

ビル・パトナム
http://www.oceanwayrecording.com/about-history.php

キティ伊豆スタジオ
http://www.izu-studio.com/

# ９．スタジオグリーンバード

株式会社メディア・インテグレーション
岡田 詞朗

2015 年 7 月 27 日（月）にスタジオグリーンバード様（1999 年設立、東京都新宿区新宿 1-12-5）（以下敬称略）にて 第 9 回スタジオ見学会が開催されました。

まず最初にスタジオグリーンバードの概要説明をスタジオテイクワン時代のお話しから現在までスタジオグリーンバード広田 哲也氏とスタジオテイクワンの OB である秋野 賢市氏からお話頂くことでスタジオ見学会はスタートしました。そして天井高 5m を有し、日本でもトップクラスの響きを持つ Studio1 と Studio2 の構築を前述の秋野氏及び日本音響エンジニアリング山梨 忠志氏よりお話頂きました。

スタジオ自体の設立は 1985 年、秋野氏を含めた当時のスタッフはウェストコースト・サウンドに憧れ主にロスアンジェルスのスタジオを視察、サンセット・サウンド等を手がけられていたアコーステイック・デザイナー、ジョージ・アウグスパーカー氏と、スタジオ建築家のジャック・エドワード氏にスタジオ・デザインを依頼されたそうです。そのエドワード氏の設計図を元に山梨氏が施工図を起こし、スタジオ構築は進行したそうです。
将来的にも対応可能となるよう、出来る限りナチュラルなアコースティック・ルームを目指したスタジオのその特徴は、ライブエリアにおいてエドワード氏の特徴的なデザインと言える逆Ｖの字形音響拡散パネルと可動式カーテンによる音響調整が可能な反射性内装壁を組み込むことにより適度な吸音処理を実現、デッドエリアも吸音面と反射をクロス裏で処理し、全体がナチュラルな響きになる音響処理を行ったそうです。
また当初から懸念されていた地下鉄の騒音をいかに遮音し、それが実現出来たかのお話しがとても印象的でした。

そして音楽に対するサラウンドの可能性をいち早くとらえ、5.1ch 対応でマルチブースを有する音楽スタジオを他に先駆けて 1999 年にオープンとの枕詞でその設計に携わられたソナの中原 雅考氏より Studio 3 のお話しを頂きました。「1999 年に DVD-Audio や SA-CD が登場、2000 年に BS デジタル放送が開始、2001 年にデニス・サンズ氏のサラウンドセミナーを JAPRS にて開催、2002 年に Yamaha から DM2000 がリリースされるなどの歴史から振り返ると、当時の Greenbird の先見性は素晴らしかったといえます。」とのコメントと共に、

１．　レコーディングとミキシングが可能な 5.1ch サラウンド対応音楽スタジオ。5.1ch Control Room（プロジェクタ、音響透過型スクリーン設置）、Main Booth × 1、Isolation Booth × 3、チムニー× 1、EMT ルーム× 2、マシンルーム× 1。
２．　5ch の全てのスピーカは、音響的に同条件となるようにバッフルマウント。
３．　L, C, R スピーカ（特注設計の Dynaudio M3）の設置部は、天井からの吊り構造では無く、床から鉄骨柱で支えるメカニカルアース構造。
４．　JBL 製のサブウーファを使用し、LFE に関しても確実な特性（周波数、レベル）で再生可能。

上記特徴を主軸に説明そして実際の試聴を頂きました。

スタジオ見学会後に広田氏にお伺いしたところ、スタジオグリーンバードでは現在、スタッフ一同に秋野さんをアドバイザーとして迎え各コントロール・ルームのモニター・チューニング等を実施されているそうです。また制作に携わった楽曲はもちろんのこと、その他の音源も含めそれらを試聴、サウンドに関する様々なディスカッションをスタッフ間にて行い、音の本質とは何かを日夜求め続けているとのことです。それら活動がスタッフの力量を高め、またスタジオ自体が音の本質を容易に理解できる環境造りに大きく貢献していることは言うまでもありません。

今後のスタジオグリーンバードの益々のご活躍に期待を膨らまし、本レポートを終わりにしたいと思います。

# 10. マルニスタジオ

株式会社グリーンバード
広田 哲也

平成27年8月27日（木)、第10回スタジオ見学会が、昨年度よりJAPRS準会員となったマルニスタジオ様で開催されました。私自身、マルニスタジオ様を訪問するのは初めてでしたので、わくわくする気持ちで当日を迎えました。

マルニスタジオ様は、福岡県の博多で不動産業などを営んでいる株式会社丸二商会様のスタジオ事業部として、1994年4月、目黒区青葉台の地で開業されました。音楽レコーディングスタジオとポストプロダクションスタジオの両方を運営されていますが、今回はスタジオマネージャーの内藤重利様にご案内いただき、音楽スタジオのStudio-1とStudio-2を見学させていただきました。

内藤 重利 氏

スタジオ専用に建設されたビルの地下２階にあるStudio-1は、３mの天井高を持つメインフロアと、大小３つのブースで構成されています。4人編成のリズム録りやストリングスカルテット、３管録音が可能なレイアウトです。このスタジオで特に目を引いたのは、メインフロア中央部の天井から壁にかけて反射板が設置されていたことです。大きさや角度が計算されたこの反射板の下でドラムを演奏すると、豊かなルームアンビエンスを得られるため、ミュージシャンの方にも大変評判が良いとのことです。是非、実際にサウンドを聴いてみたいと思いました。

またスタジオとコントロールルームの間が大きなガラス面になっており、演奏者とのコミュニケーションが非常にとりやすいスタジオだなと思いました。このアイデアは設計時にオーナー様から出たアイデアとのことで、ミュージシャンとのコミュニケーションがとりやすい環境を作るということを、非常に大切にされていたのだなと思いました。

コントロールルームの核となるコンソールにはSSL Dualityが設置され、また、メインとなるモニタースピーカーにはWestlake Audio Lc3w12が使用されています。このスピーカーはオーナー様が非常に愛着を持たれているスピーカーとのことで、ここにもスタジオに対するオーナー様の想いを感じることができました。その他ヘッドアンプやコンプレッサー、イコライザーなども豊富に揃っていますし、Pro ToolsはHDXシステムが導入されており、アナログとデジタルがハイレベルで融合された環境になっていました。映像を見ながらの作業も可能とのことですので、非常に幅広い作業をこなせるスタジオとなっています。

このStudio-1のコントロールルームには内藤様やチーフエンジニアの中原正幸様始め、エンジニアの皆さんが、非常に工夫をしている部分があります。この部屋には前述した大きなガラス面があり、コミュニケーションをとりやすいという長所がある反面、音響的な反射が出やすいという環境でもあるわけですが、その反射を抑えるため、これまでいろいろな対策を施されてきたそうです。

そしてついに、他スタジオでは見られない吸音材を使用することによって、この問題を改善することができたそうです。その吸音材は「フィルバ」という、有孔ポリカーボネート板とフッ素樹脂フィルムを重ね合わせたもので、道路工事の防音対策などに使われるそうです。この透明な吸音材をガラス面に貼ることによって、広い視界を確保しつつ、音を詰まらせずに吸音することに成功したのだそうです。多くの試行錯誤の末に、この吸音材に着目し、現在の環境を作り上げたスタッフの皆さんの熱意には、大変驚かされました。

続いて、２階にあるStudio-2を見学させていただきました。こちらのスタジオはゆったりとしたコントロールルームと小さめのブース２つで構成されています。作品制作過程の最終段階であるボーカルダビングやトラックダウン、そして5.1chサラウンドミックスができる仕様になっています。システムの中心にはAvid Pro Tools HDXとD-Commandが据えられ、ステレオ作業用のメインモニタースピーカーはMusik Electronic Geithain RL901K、5.1chサラウンド作業用スピーカーにはM&K MPSシリーズと異なるモニター環境が用意されていました。

ダビング用の２つのブースにもルームアコースティック向上のための内装工事を実施されたとのことで、スタッフの皆さんのこだわりが感じられました。

今回マルニスタジオ様を見学させていただき感じたことは、スタッフの皆さんが日々創意工夫をし、情熱を持ってスタジオ運営されているということです。

また内藤様は、今後、若い人たちがレコーディングに興味を持ってもらえるような取り組みをしていきたいとおっしゃっていました。同じくスタジオを運営する立場の私としては、非常に刺激的な時間で、あらためて自分の日常を見つめ直す良い機会となりました。このような機会をいただき、マルニスタジオ様には感謝いたします。ありがとうございました。

# 第16回 JAPRS 新プロ・エンジニア養成セミナーレポート

平成12年第1回目を開催して以来、今年で16年目を迎えたのが、この新プロ・エンジニア養成セミナーです。

専門学校委員会の主催により実施されているこのセミナーは、JAPRS 賛助会員加盟専門学校19校の2年生以上を対象として、東京地区、大阪地区正会員スタジオの協力により継続されているもので、プロのレコーディングスタジオにおけるセッション開始前のスタジオセットアップおよびミックスダウン･デモを体験させることを主目的としています。今回は、6月6日（土）～6月13日（土）の期間で東京地区1日2回、大阪地区1日1回開催。

実施内容

①アシスタントエンジニアによるスタジオブースの説明
②アシスタントエンジニアからのアドバイス
③ミックスダウンのセットアップ
④ミックスダウン・デモ
　2ch バランス・2ch メーターの確認　EQ の使用方法　DYN・INS 系の使用方法
　クロス・パッチ等　AUX 系のエフェクタ・バランス トータル処理の方法

東京地区会場
（6月6日（土）於：
サウンドインスタジオ Bst）
参加者：8校33名
エンジニア：吉田　保 氏
アシスタントエンジニア：稲垣　杏里 氏
サポート：佐藤　友紀 氏

サウンドインスタジオ Bst

スタジオグルーヴ Ast

大阪地区会場
（6月13日（土）於：
スタジオグルーヴ Ast）
参加者：2校　15名
エンジニア：吉田　保 氏
アシスタントエンジニア：阪本　真優 氏

タイムスケジュール

東京会場：サウンドインスタジオ Bst
6月6日（土）
1回目　13：00～15：15
2回目　15：30～17：45

大阪会場：スタジオグルーヴ Ast
6月13日（土）
1回目　14：00～16：15

# 平成 27 年度通常総会＆懇親会レポート

〈通常総会〉

6 月 10 日（水）、JAPRS は港区元赤坂の明治記念館１Ｆ「芙蓉の間」において、平成 27 年度通常総会を開催し、平成 26 年度の事業報告書（案）決算報告書（案）、平成 27 年度事業計画書（案）及び収支予算書（案）について正会員に諮り、全ての議案が異議なく全員一致で承認された。

はじめに、佐藤事務局長が定足数の確認を行い、書面表決書を含む 36 名の出席数を確認（定足数）、総会の開会を宣言した。

総会

続いて内沼会長が議長に当たり、議事録署名人として副会長の石野 和男氏、専務理事の高田 英男氏の両名が選出された。

次に石野副会長より第１号議案「平成 26 年度事業報告書（案）」及び佐藤事務局長より「収支決算報告書（案）」について説明が行われ、審議の結果、異議なく全員一致で承認された。

続いて石野副会長より第２号議案「平成 27 年度事業計画書（案）」及び佐藤事務局長より「収支予算書（案）」について説明が行われ、審議の結果、第１号議案と同様に全員一致で承認された。最後に議長である内沼会長が閉会を宣し解散した。

〈懇親会〉

内沼 会長

経済産業省
望月 孝洋 氏

通常総会終了後、18:30 より明治記念館１Ｆ「相生の間」において、正会員、準会員、賛助会員及び招待者を含む 78 名が集い、懇親会が開催された。

司会進行は総務委員会の江下 規彦氏（ヴァストミュージック・エージェンシー）と茂木 泰佑氏（個人会員）の２名が担当し、内沼会長の開会の挨拶に続き、経済産業省 商務情報政策局 文化情報関連産業課 課長補佐　望月 孝洋氏により来賓代表として挨拶が述べられた。

続いて乾杯となり、恒例により本年から賛助会員として新たに入会された 株式会社静科、経営企画室長、武 紘一氏により乾杯の発声が行われ、歓談タイムとなる。

（株）静科
武 紘一 氏

高田 専務理事

更に歓談が続くうちに中締めの時間となり、専務理事 高田 英男氏による挨拶が行われ、本年の懇親会も無事に終了となりました。

スタッフとして開宴前より準備にご協力いただいた会員の皆様、有難うございました。

# 第 14 回 JAPRS 認定「サウンドレコーディング技術認定試験」実施報告

７月５日（日）、札幌、仙台×２、新潟、東京×９、静岡、名古屋×３、大阪×３、広島、那覇の９地区 22 ヶ所の団体受験会場に分散して実施された「第 14 回サウンドレコーディング技術認定試験」については、当初の受験申請者数 713 名に対し、欠席者 104 名を除く当日の受験者数 609 名の参加により実施されました。

試験内容は例年通り四者択一マークシート方式で、音響の理論 / 電気音響とスタジオシステム / レコーディング技術と先進技術/音楽・音楽著作権・音楽録音の流れ・録音の歴史などの４ジャンルから各 25 問（計 100 問、1000 点満点）が出題されましたが、平均点は 766.4 点という結果になりました。

以下の通り実施結果の詳細を報告致します。

専門学校東京ビジュアルアーツ

経専音楽放送芸術専門学校

（１）受験申請者 713 名　欠席 104 名　受験者 609 名
　　最低点 220 点　最高点 1000 点（12 名）　平均点 766.4 点

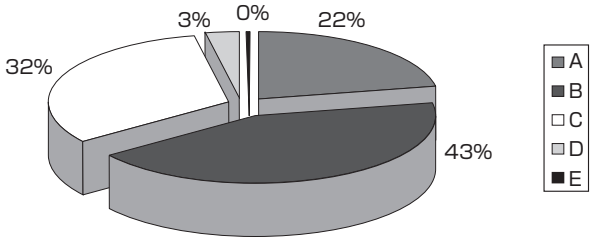
（２）平均点詳細（各ブロック 250 点満点）
　Ⅰ. 音響の理論
　　正答率 77.8%　平均点 194.5 点
　Ⅱ. 電気音響とスタジオシステム
　　正答率 75.6%　平均点 189 点
　Ⅲ. レコーディング技術と先進技術
　　正答率 78.6%　平均点 196.4 点
　Ⅳ. 音楽・音楽著作権・音楽録音の流れ・録音の歴史など
　　正答率 74.6%　平均点 186.5 点

（３）得点別人数

| | |
|---|---|
| 1000 ～ 900 | 146 名 |
| 890 ～ 800 | 127 名 |
| 790 ～ 700 | 146 名 |
| 690 ～ 600 | 112 名 |
| 590 ～ 500 | 53 名 |
| 490 ～ 400 | 17 名 |
| 390 ～ 300 | 4 名 |
| 290 ～ 200 | 4 名 |
| 0 | 0 名 |
| 計 | 609 名 |

（４）ランク別人数

| | | |
|---|---|---|
| Ａランク | 1000 ～ 901 点 | 135 名 |
| Ｂ　〃 | 900 ～ 701 点 | 264 名 |
| Ｃ　〃 | 700 ～ 451 点 | 194 名 |
| Ｄ　〃 | 450 ～ 201 点 | 16 名 |
| Ｅ　〃 | 200 点以下 | 0 名 |
| 計 | | 609 名 |



# レコーディング勉強会レポート part Ⅰ

オタリテック株式会社　技術部
島田 健太朗

平成27年8月5日（水）、賛助会員を対象としたレコーディング勉強会が東京都千代田区四番町にあるサウンドインスタジオにて実施されました。参加者は23名でした。

サウンドインスタジオは、音楽録音業務を主体とした1979年設立のスタジオで、音楽録音スタジオはA、B、C、F、Gの5部屋、MAスタジオはJ、K/Mの2部屋あります。

今回は、国内屈指の広さ（約170㎡）を持ち、フルオーケストラの収録も可能なAスタジオにてレコーディング勉強会が実施されました。

Aスタジオのメインフロアは、ライブゾーン、ニュートラルゾーンおよびデッドゾーンと大きく3つに分けられています。ブースはドラム、ピアノ用など合計6つあり、様々なニーズに対応できるつくりとなっています。

今回のレコーディング勉強会は、「レコーディングに関するワークフロー」「スタジオ機能の説明」「DAW関連説明」「マイクセッティング関連説明」「レコーディング」「ラフミックス」の内容の順に実施されました。

㈱サウンドインスタジオの相川様、大槻様より、「レコーディングに関するワークフロー」、「スタジオ機能の説明」についてご説明いただきました。

レコーディングに関するワークフローでは無形物である音楽が市場販売されるまでの流れをワークフローで、アーティストが作詞作曲を行って市場で販売されるまでのエンジニアやレコーディングスタジオの仕事内容や相関などを勉強させていただきました。

スタジオ機能についてでは、コントロールルームにはSSLのアナログコンソールXL9064Kと5.1chディフューズ・サラウンドモニターシステム、ラージモニターにはQUESTEDのQ412が導入され、56in 56outのPro Tools同時録音をサラウンドモニター環境で行うことができます。

今回スモールモニターはGENELECの8050が使用されておりました。

室間設備として壁面は空洞に布を覆った壁、床面もビルの床から50cm程上げた浮床構造にすることにより、遮音性およびスタジオ内の音作りに部屋が機能していることを勉強させていただきました。

次にアシスタントエンジニアの㈱ミキサーズラボ・石光孝様より、「DAW（Digital Audio Workstation）関連説明」の中で、波形編集に特化しているPro Toolsについての説明をしていただきました。

内沼映二様より「マイクセッティング関連説明」ではメインフロアに移動し、ブースを

使用したドラムおよびフロアにセッティングされたピアノ、ベース、ボーカル、ギターの各楽器についてさまざまな種類のマイクの中から曲の雰囲気・ニーズに合わせたマイク、そして波長を考慮してセッティングされた説明を受けて、設定されたマイクポジションを見学しました。今回の見学箇所はセミナー全体の時間の関係上セッティング済みでした。

レコーディングおよびミキシングでは、エンジニアは㈱ミキサーズラボの内沼映二様、アシスタントには㈱ミキサーズラボの石光孝様と㈱サウンドインスタジオ稲垣杏里様、演奏者は生ピアノ＆ボーカル、ギター、ベース、ドラムで編成されたバンド Haregalas（ハレガラス）の皆様にて行われました。

最初に楽器だけでの録音をし、その後それぞれの楽器ごとでの直し作業を小節ごとに再度録音し直し修正、次に 2nd ギター、3rd ギターの録音も小節ごとに録音、その後ボーカル録りが行われ、コーラスなどを録音しレコーディングが進められました。

レコーディングの録音中でも、Pro Tools での作業は止まることはなく、ほぼ同時進行で Pro Tools に録音したパートごとの音源の無音時のノイズをカットする作業が行われていました。雰囲気を出すためにノイズを残す場合や、ピアノの場合ピアノの余韻を残す削り方、それらの方法を Pro Tools の画面上の波形だけで、どのようなノイズかを判断し削るのか残すのかを瞬時に判断し処理が行われていました。

レコーディング作業風景では、レコーディングエンジニアとアシスタントの方々の作業の早さは素人目に見ても早く、又、バンドの方がどのようなサウンドを目指しているのかという事をミュージシャンの方々とコミュニケーションを取りながら把握し、短時間のうちに１曲を仕上げられていく様子に驚きました。
録音の段階でも、常にメーターを確認し素早くフェーダーを操作しバランスの良い音に仕上げる、プロのエンジニアのレコーディングの進め方や雰囲気を体験することができ、非常に勉強になりました。

最後に、私は音響機材の輸入代理店の技術職をしておりまして、実際のレコーディングの作業現場を見る機会はほとんど有りませんので、とても貴重な経験をさせて頂きました。
このような勉強会を執り行っていただいた JAPRS の皆様、レコーディングの講師をしていただきましたミキサーズラボの皆様、ならびにスタジオを調整していただいたサウンドインの皆様方に、この場をお借りして、お礼申し上げます。
有難うございました。

## レコーディング勉強会レポート part Ⅱ

ミックスウェーブ株式会社
寺島 健裕

夏まっただ中の 8/5（水）、サウンドインスタジオ Ａｓｔにて、「レコーディング勉強会」が行われました。

内容
１．レコーディングに関するワークフロー
２．スタジオ機能の説明
３．DAW 関連説明
４．マイクセッティング関連説明
５．レコーディング
６．ラフミックス
７．質疑応答

• レコーディングに関するワークフロー
サウンドイン　相川さんより、スタジオビジネスの流れの説明がありました。
スタジオからみると原盤制作会社（プロダクションや出版社、レコード会社）がクライアントとなり、コーディネーターがミュージシャンのブッキングなどを行い、レコーディングが行われます。
レコーディング終了後は､作業伝票という伝票を参照しクライアントに請求を行います。
また、サウンドインさんは昔から紙面でのスケジュール管理を行っているとのことでした。その方が後から修正事項や追加する事項を直接書き込めるので便利、とのことでした。

• スタジオ機能と DAW 関連の説明
サウンドイン 大槻さんよりスタジオ機能の説明、ミキサーズラボの石さんより DAW 関連の説明がありました。
SSL の 64ch コンソールを中心としたシステムだということです。
また、I/O は HD I/O、ゴミ箱の MAC で OS は Mavericks とのこと。
HD I/O は 4 台を使用して 54ch In/Out のシステムを実現しているそうです。
当時 Pro Tools を導入した理由としては、波形編集に特化していたからだとおっしゃっていました。
またラージモニターは QUESTED というメーカーのもので、スモールモニターは内沼さんが持ち込んだ GENELEC8050 でした。
ラージモニターは低域が出るのでその確認にも使用するとおっしゃっていました。

• マイクセッティング関連説明
JAPRS の会長でもあり、エンジニアとしても大変著名である内沼さんよりマイクセッティングの説明がありました。
まずはマイクリストを用いて使用されているマイクの説明がありました。
かなり細かい部分まで説明をしていただき勉強になりました。
ドラムマイクの audio-technica ATM25 は３０年前から使っているとのこと。
また Electro-Voice N/D408 はクリアでカブリが少ないので重宝しているとのことです。
ボーカルには NEUMANN U67 のビンテージマイクを使用。
最近は時間の制約があり、レコーディング時に新しいマイクを試すことはなかなか難しいそうなのですが、レコーディング以外の時間にテストをすることはもちろんあるそうです。
次にマイキングの説明がありました（実際に見学ができました）。
ドラムのマイキングは位相のずれ、カブリがあるため大変難しいとのこと。
カブリの少ないマイクで、極力少ない本数で録られているそうです。

Haregalas メンバー

- レコーディング、ラフミックス

HAREGALASというバンドさんが登場して実際のレコーディングの見学に移りました。
今回は 96kHz 24bit での録音でした。
特に目立ったハプニングはなく、スムーズに録音が行われ、2 テイクごとに私たちも音を確認することができました。
今回コンプはボーカルに Urei 1176 をかけているだけだということです。
また EQ は卓のものも良いということですが、今回は API 560 も使用しているとのこと。
ドラムにはかなり使用しているが他はそこまでかけていない、ということでした。
またディレイは 186ms に設定しているとのことで、これは内沼さんが昔編み出されたそうなのですが、非常に気持ちの良いかかり具合だとのこと。
また、石さんが正に職人技という感じの手さばきであっという間にエディット（いらない部分の消去、フェードをかけたり、タイムラインの調節など）を終わらせていました。
（後程、元の状態から説明をしていただきました）
ノイズを全部消去したり、タイムラインの調節はきっちり揃えすぎてしまうと音楽的ではなくなってしまうので、このあたりがセンスが問われるそうです。
もちろんミュージシャンの方とも相談して決めていくとのこと。
ラフミックスですが、最近は Pro Tools 内でミックスを行う人も増えてきたが、内沼さんは Pro Tools のみでのミックスはせず、アナログでミックスをしているとのこと。
ラフミックスで完成とも思えるくらい完成度の高いものが出来上がっていました。

- 質疑応答

内沼さんが、グラフィック EQ とパラメトリック EQ の使い分けや 1 年間に仕上げる曲数、DSD と PCM の違いなどについての質問に丁寧に答えておられました。
PCM だと 384kHz、DSD だと 11.2MHz からが実際のアナログの波形に近いということです。

- 感想

実際のレコーディングを見学する貴重な機会となり有意義な時間を過ごすことができました。
また、終始なごやかな雰囲気でリラックスして見学をすることができました。
特に、内沼さんや石さんなど第一線でご活躍をされておられる方のお話が聞けたり、作業の様子を見学できる機会はなかなかなく、大変勉強になりました。

# beBlue AOYAMA Dolby Atmos セミナーレポート

JAPRS　技術委員長
高田 英男

1．主旨
映画業界における 3DAudio が話題になっている今、音楽ソフト制作における Dolby Atmos システムによる 3D サラウンドサウンドを試聴体験する。
更に beBlue AOYAMA スタジオ概要説明～ Dolby Atmos による 3D Audio 制作説明セミナーを実施。

2．期日
平成 27 年 9 月 2 日（木）
13：30　～　15：00
15：30　～　17：00

3．場所
beBlue AOYAMA STUDIO
東京都港区北青山二丁目 7 番 25 号　神宮外苑ビル　B1F
TEL：03-6455-4540

4．参加人数
22 名

5．内容
Ⅰ．スタジオ概要～ Dolby Atmos システム説明
　　染谷　和孝　氏　（beBlue AOYAMA STUDIO）
Ⅱ．スタジオ音響設計説明
　　中原　雅考　氏　（株）ソナ
Ⅲ．Dolby Atmos デモ試聴
　　染谷　和孝　氏　（beBlue AOYAMA STUDIO）
　　高田　英男　氏　（フリーランス・エンジニア）

染谷 和孝 氏　中原 雅考 氏　高田 英男 氏

6．音楽ソフト Dolby Atmos 試聴体験
スタジオ協会技術セミナー Dolby Atmos としては昨年度、東映撮影所内ダビングステージで開催しており、今回で 2 回目の技術セミナーとなる。beBlue AOYAMA STUDIO はコンパクトで作業がし易く、モニター環境も大変分かり易く映画における Dolby Atmos ミックス作業や、音楽ソフト制作における映像音源ミックス～ MA 作業まで効率良く作業が出来るスタジオである。
今回セミナーでは音楽ソフト制作における 3D Audio の可能性がテーマであり、個人的にもサラウンドサウンドにおける高さ表現について大変興味を持って参加した。
音楽ソフト音源の Dolby Atmos ミックスについては下記作業にてミックスを行った。

1．ホームオーディオを考慮した Dolby Atmos7.1.4ch での音創り。
2．Bed（基本的サラウンド）7.1ch は事前にビクタースタジオにてミックス。

3．Object（高さ・位置情報）音源は素材音源として準備。
4．Dolby Atmos ミックスを beBlue AOYAMA にて行う。

Dolby Atmos 音楽ソフトミックスへの魅力

1．5.1ch サラウンド～ 7.1ch サラウンドの違いとして、別次元の自然でリアル感あるサラウンドサウンドが作れる。
2．天上スピーカーを使った高さ表現では、音の移動感を中心に意図的に高さ表現を感じるパンニングを行い、高さを感じる音に包み込まれるサウンドを体感。
3．チャンネル数が増える事により高解像力サラウンドサウンドが作れる可能性があり、ハイレゾ・サラウンドサウンドのイメージを感じた。
4．Bed7.1ch の音創りが基本的には重要であり、基本サラウンドサウンドの創り込みが、より良い Object 効果（高さ、定位感）を創り出す。
5．Dolby Atmos ミックス作業は、従来の音楽ミックスと比較して大きな作業負担を伴う事では無く、サラウンドミックスのノウハウ＋ α の感覚でミックス対応が可能。
6．音楽制作におけるモニタースピーカー環境と Dolby Atmos モニター環境に互換性があり、違和感の無いモニター環境でミックスが出来る。

＊ミックス作業レポートについては添付資料参照

7．感想

3D Audio ビジネスとして映画業界では AURO-3D、Dolby Atmos などが海外で制作～ 3D Audio 対応映画館が増えて行く中、国内においては漸く 3D Audio による映画製作がスタート試聴出来る映画館が増えつつある今、音楽ソフトにおける 3D Audio ミックスを体験、音楽表現における新たな可能性を体験する事が出来た。
音楽ソフト制作における 3D Audio はホール録音（クラシック）制作においては、高さを表現するハイトチャンネル録音技術も進み、実際に音楽ソフトとして販売されており、今後制作の広がりが期待出来る。更にライブ録音やアニメ制作および、ゲームソフトへの活用が広がる可能性を大きく感じる。
J-POP、ロックなどへの広がりは少しハードルが高い感じもするが、3D Audio の再生環境が拡大し、ポータブルプレーヤーやスマホにアプリソフトが入りヘッドホーンによる 3D Audio が楽しめれば、音楽ソフトへの普及も多いに期待出来ると感じる。
まずは体験し、3D Audio 録音制作へチャレンジし、新たな音楽ビジネスを
創って行く事が音楽業界にとっても大切な事と感じた次第である。

最後になりましたが、今回 Dolby Atmos セミナーにご協力頂きました beBlue AOYAMA STUDIO 染谷様、（株）ソナ中原様に厚く御礼を申し上げます。

## 3D Audio・Dolby Atmos
## 7.1.4ch MIX

音楽ソフト制作へのトライ

サウンド・プロデューサー
高田　英男

## これが音楽の底力
村上“ポンタ”秀一

- 7 Seven
- Produced & Arranged by
  Shuichi “PONTA”Murakami & Akira Inoue
- ・Engineer　Hideo Takada
- ・Recorded by Victor Studio 2008
- ・Dolby Atmos　Mix by　Be-Blue Aoyama　2015

## レコーディング　風景

## 村上“ポンタ”秀一

## 3D Audio・　Dolby Atmos

音楽ソフトへのDolby Atmos
ホール録音　／　スタジオ録音

明確なサラウンド
サウンドイメージ

3D Audioの必然性

☆3D Audio・サウンドテーマを決める
アレンジ～演奏フレーズ・・・・考慮。

村上“ポンタ”秀一
音響空間を核！

## Bed「7.1CH」 サラウンドの魅力-1

5.1CH～7.1CH音場表現の変化

☆Lss / Rssスピーカー効果・・自然なサラウンドサウンド。
☆各楽器の面音場表現（例　FL/Lss, Lss/SL)で創れる
リアル感あるサウンド。

☆5.1CHとは別次元の自然で深いサラウンド・サウンドが創れる。

## Bed「7.1CH」 サラウンドの魅力-2

Bedサラウンド創りが最重要ポイント！

☆音楽録音制作・基本的ノウハウを生かした音創り。
- ・安定感のある中低音域創り
  （SWチャンネル・バランス注意）
- ・センタースピーカーのサブ的使用（SN,KICK)
- ・素直に伸びた帯域バランス
- ・Dolby Atmos効果をイメージした解放感あるサラウンド
  音場空間創り

## Bed「7.1CH」 サラウンドの魅力-3

スタジオモニターSP/Dolby Atmos　モニターシステム
互換性

☆音楽制作スタジオでは同一機種による
サラウンドモニターが基本。
☆Dolby Atmosモニター環境での再生に
違和感が無い。

## Object（高さ表現・位置情報）

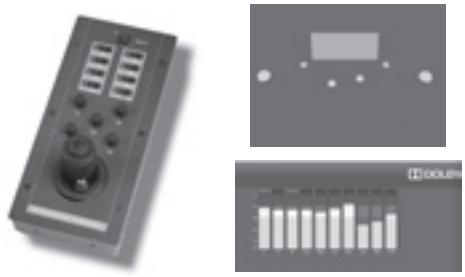
Dolby Atmos効果音の素材創り

☆明確な音源移動軌跡イメージ創り。
- ・パンニング
- ・ディレー
- ・リバーブ

☆EQ／COMPによる芯のある素材音源。

## Dolby Atmos　Mix by　Be-Blue Aoyama
7.1.4CH

## Dolby Atmos Panner & Monitor



## Dolby Atmos Rendering Mastering unit

## 3D Audio・ Dolby Atmos 魅力

## 3D Audio 音楽ソフト制作への考査-1
## 制作現場

①Bed 7.1CHプリミックスの重要性。
　＊音楽スタジオにおけるモニター設置スペース
　　＆モニター・コントロールシステム検討
②Object　事前素材音源創り込み。
③映像と音源の位置感覚 「同期・自由表現」
④Dolby Atmos設置スタジオとの連携。
⑤Dolby Atmosマスタリングシステム構築。

## 3D Audio音楽ソフト制作への考査-2
## 課題

再生環境拡大
　①ホームオーディオ
　②ヘッドホーン再生

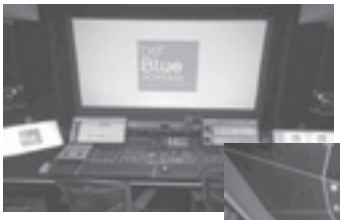
制作推進
　①サラウンドサウンドによる音楽制作への普及
　　＊7.1CHサラウンドサウンド
　②映像無し音楽（音源）によるサラウンド制作
　③3D Audio魅力に繋げる！

# beBlue Aoyama Studio

## Regarding Studio 0”Zero” for Dolby Atmos

**Sound Designer / Re-recording Mixer**

**Kazutaka Someya**



## beBlue Aoyama

## Regarding Studio 0”Zero” for Dolby Atmos

・Main target of Studio 0 “Zero”

1. Dolby Atmos
   Local Renderer

## beBlue Aoyama

### Work Flow of Dolby Atmos for Home

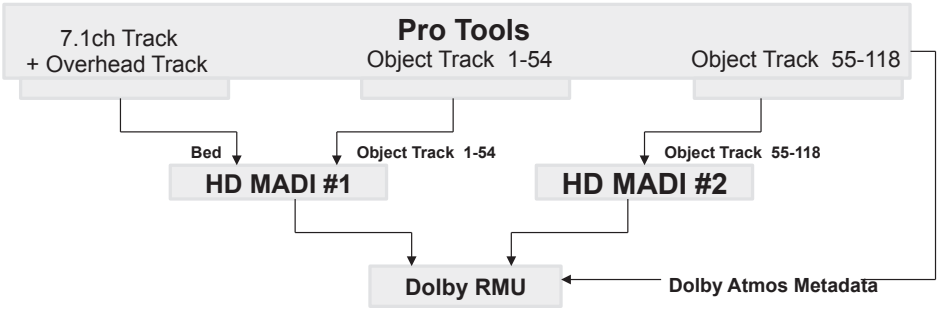



Figure 1-2 Basic Dolby Atmos System Block Diagram

- Pro Tools multichannel tracks and signal routing define bed and object audio. High -Definition Multichannel Audio Digital Interface (HD MADI) format interfaces receive audio from Pro Tools and send it to the Dolby RMU.
- Panner plug-ins on audio tracks in Pro Tools that contain object audio, along with their automation playlists, define Dolby Atmos metadata. One or more Pro Tools machines route metadata directly to the Dolby RMU via Ethernet.

## beBlue Aoyama

### Work Flow of Dolby Atmos for Home

A Dolby Atmos mix consists of three primary elements:

Figure 1-1 Simplified Dolby Atmos Block Diagram

- Bed track (or bed material): Channel-based premixes or stems (including their multichannel panning)
- Object track (or objects): Mono or stereo soundtrack content that have dedicated panning (via Dolby Atmos metadata)
- Dolby Atmos metadata: Panner automation for objects, plus additional metadata

## beBlue Aoyama

# Work Flow of Dolby Atmos for Home

A Dolby Atmos mix consists of three primary elements:

Figure 1-1 Simplified Dolby Atmos Block Diagram

- Bed track (or bed material): Channel-based premixes or stems (including their multichannel panning)
- Object track (or objects): Mono or stereo soundtrack content that have dedicated panning (via Dolby Atmos metadata)
- Dolby Atmos metadata: Panner automation for objects, plus additional metadata


## beBlue Aoyama

# Work Flow of Dolby Atmos for Home

A Dolby Atmos mix consists of three primary elements:

Figure 1-1 Simplified Dolby Atmos Block Diagram

- Bed track (or bed material): Channel-based premixes or stems (including their multichannel panning)
- Object track (or objects): Mono or stereo soundtrack content that have dedicated panning (via Dolby Atmos metadata)
- Dolby Atmos metadata: Panner automation for objects, plus additional metadata

## beBlue Aoyama

# Work Flow of Dolby Atmos for Home

A Dolby Atmos mix consists of three primary elements:

Figure 1-1 Simplified Dolby Atmos Block Diagram

- Bed track (or bed material): Channel-based premixes or stems (including their multichannel panning)
- Object track (or objects): Mono or stereo soundtrack content that have dedicated panning (via Dolby Atmos metadata)
- Dolby Atmos metadata: Panner automation for objects, plus additional metadata


## beBlue Aoyama

# Work Flow of Dolby Atmos for Home

A Dolby Atmos mix consists of three primary elements:

Figure 1-1 Simplified Dolby Atmos Block Diagram

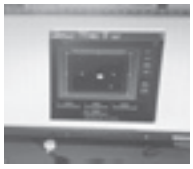
- Bed track (or bed material): Channel-based premixes or stems (including their multichannel panning)
- Object track (or objects): Mono or stereo soundtrack content that have dedicated panning (via Dolby Atmos metadata)
- Dolby Atmos metadata: Panner automation for objects, plus additional metadata

## beBlue Aoyama

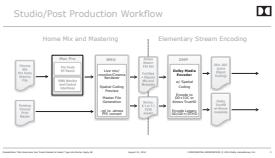
### Regarding Studio 0”Zero” for Dolby Atmos

・Main target of Studio 0 “Zero”

1. Dolby Atmos Local Renderer → Preparation and Premixing for Dolby Atmos



2. RMU for Home Theatre → Re-Master of Dolby Atmos for Home Theatre




## beBlue Aoyama

### Re-Master of Dolby Atmos for Home Theatre

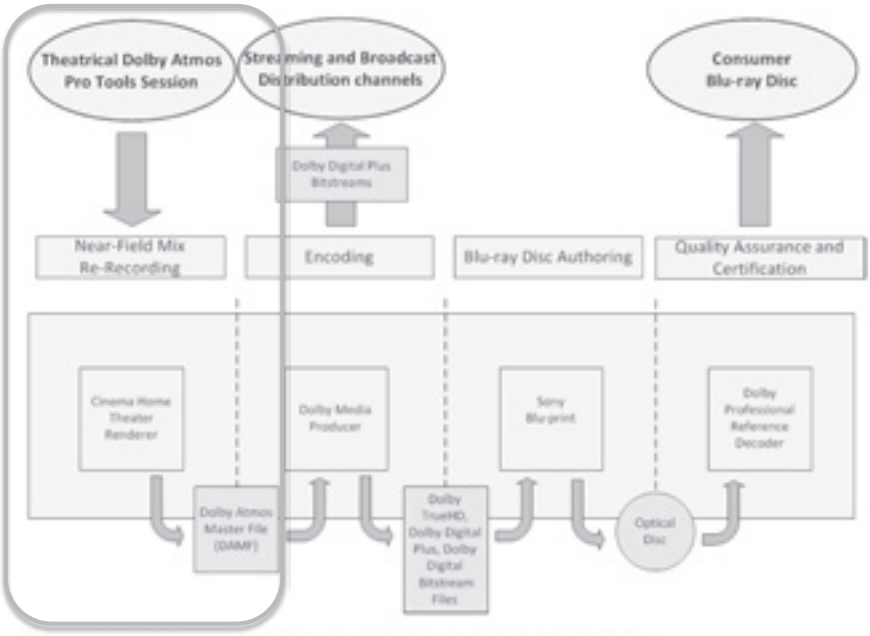
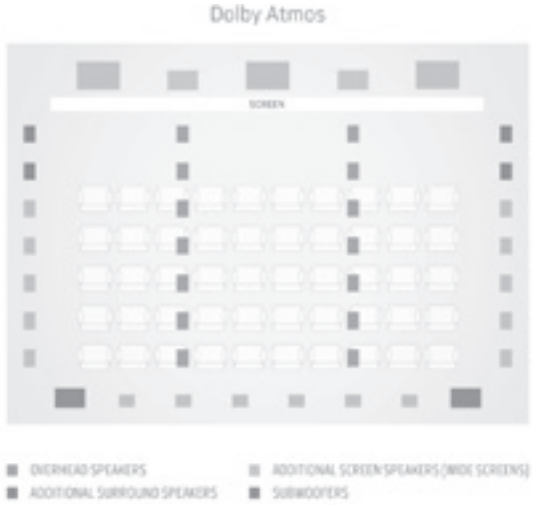



Figure 11: The content creation workflow for Dolby Atmos home content.

# beBlue Aoyama

## Re-Master of Dolby Atmos for Home Theatre

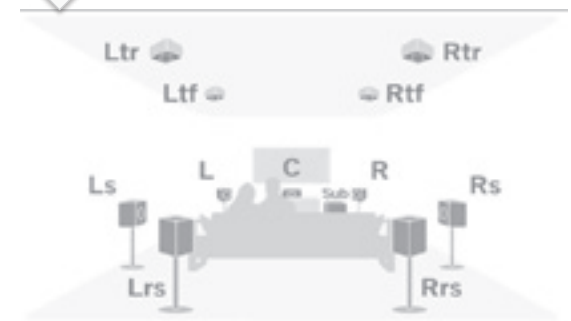



CinemaとHomeでは
「再生環境」に大きな違いがある。

その差異を少なくするための
“Re-Mastering”が不可欠になる。

・Dolby Atmos for Home

#現時点でのAtmos対応AVアンプでは、7.1.4chが最大。



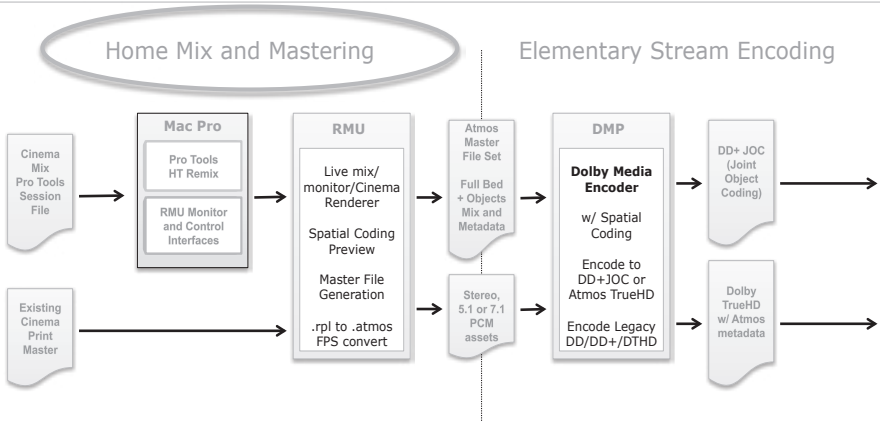

・Dolby Atmos for Cinema

#最大64の独立スピーカー出力が可能であり、どのような大きさの劇場でも、そのサイズに最適化したスピーカー数にレンダリング可能。

# beBlue Aoyama

## Re-Master of Dolby Atmos for Home Theatre

### Studio/Post Production Workflow





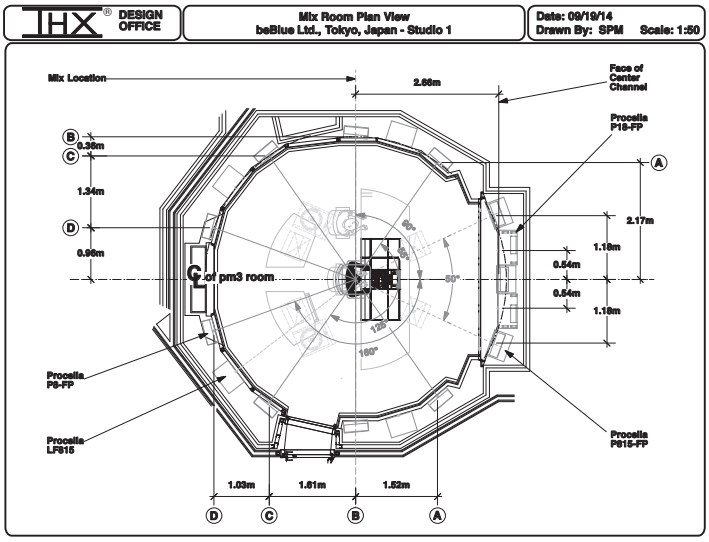
CONFIDENTIAL INFORMATION © 2014 Dolby Laboratories, Inc.

## beBlue Aoyama Studio

### Regarding Studio 0”Zero” for Dolby Atmos

・Main Regulation of Studio 0 “Zero”

**THX pm3**

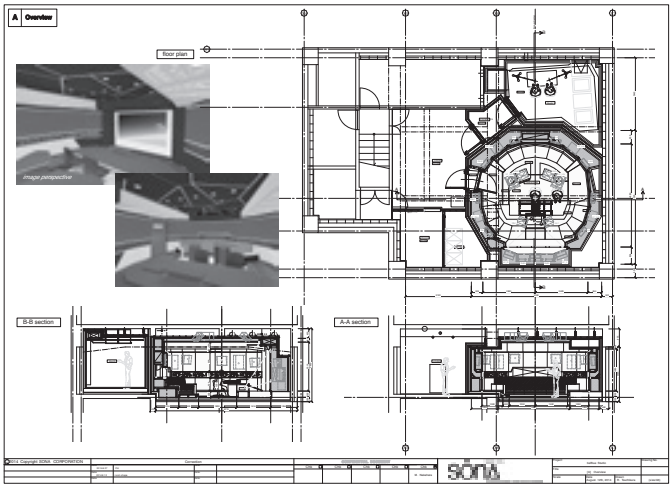



## beBlue Aoyama Studio

### Regarding Studio 0”Zero” for Dolby Atmos

・Main Regulation of Studio 0 “Zero”

**“Dolby Atmos Sound Design Studio”**

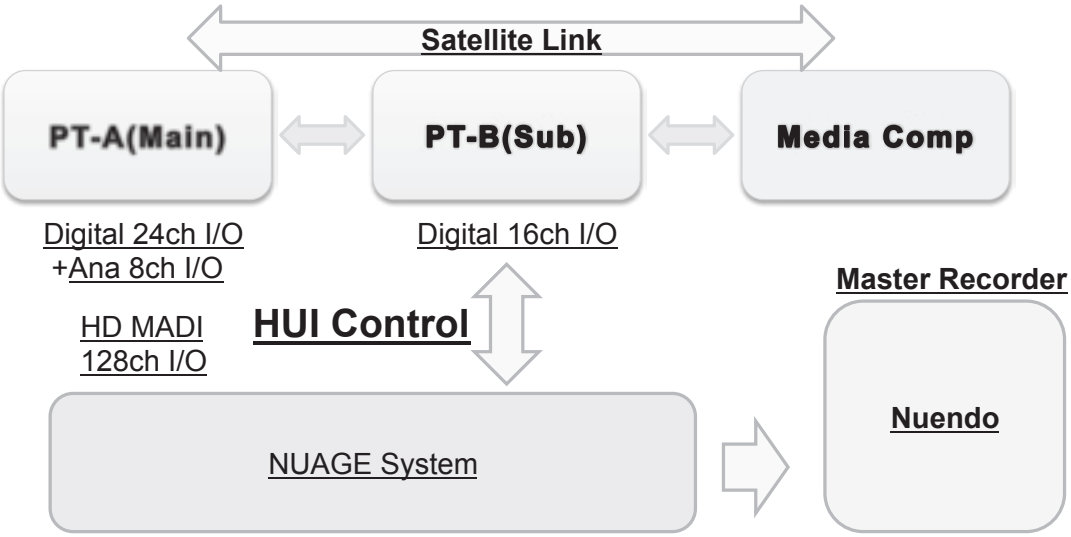


## beBlue Aoyama Studio

### Regarding Studio 0”Zero” for Dolby Atmos

・Main Engine of Studio 0 “Zero”

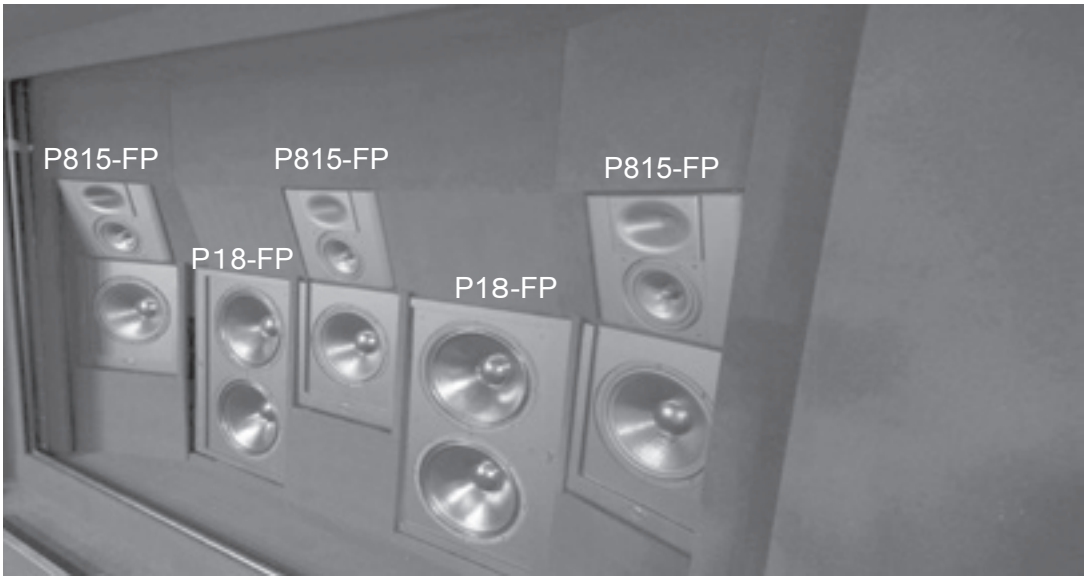
・DAW Plan




## beBlue Aoyama Studio

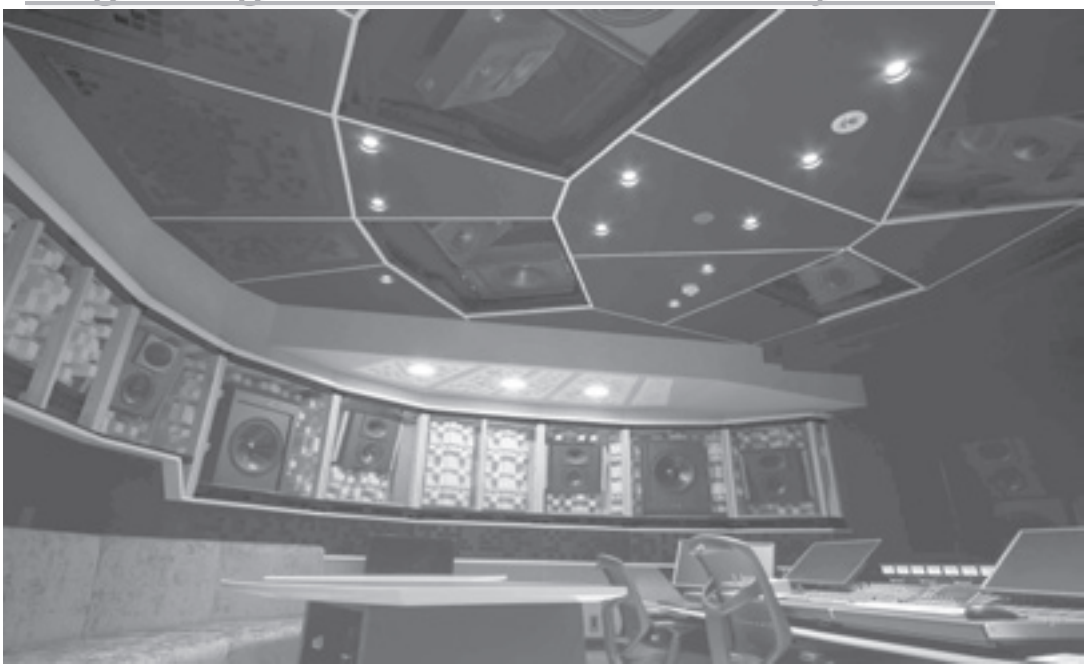
### Regarding Studio 0”Zero” for Dolby Atmos

・Main Engine of Studio 0 “Zero”



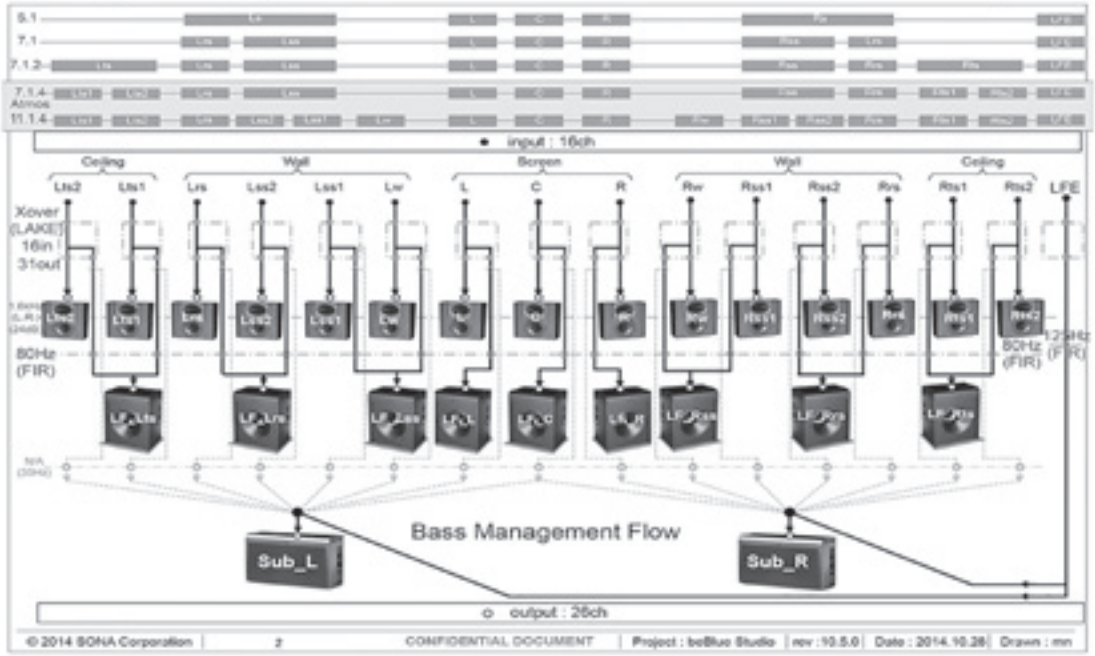
## beBlue Aoyama Studio

### Regarding Studio 0”Zero” for Dolby Atmos



## beBlue Aoyama Studio

### Regarding Studio 0”Zero” for Dolby Atmos



# beBlue Aoyama Studio

## Regarding Studio 0”Zero” for Dolby Atmos

**Sound Designer / Re-recording Mixer**

**Kazutaka Someya**

Thank you very much for coming today !!

be Blue AOYAMA
sound team of GZ-TOKYO

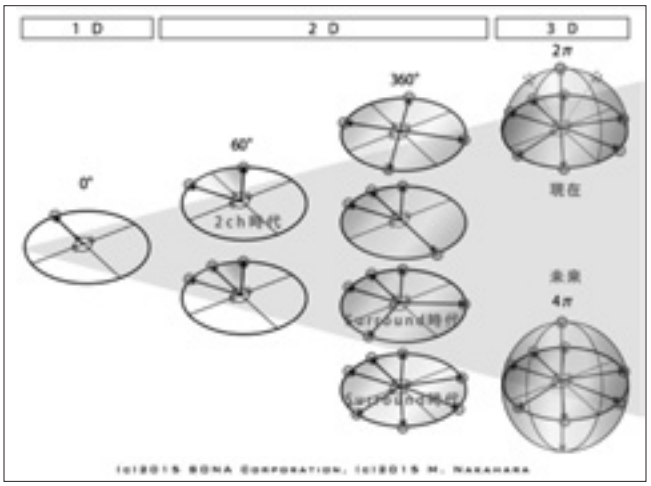
# Atmos Sound Design Studio の音響設計例
# ～ Studio 0 , beBlue Aoyama ～

株式会社ソナ
中原 雅考

モノフォニック（1D）から始まったオーディオの再生環境は、2ch 再生を足がかりとして立体音響再生へと発展しました。立体音響再生の音場は、サラウンド時代に 360° に拡張され、いよいよ 2D から天井スピーカを加えた 3D の時代を迎えています（【図 1】）。

天井にスピーカが追加されるということは、従来の平面サラウンドに加え上方からの音も表現できるようになったというとらえ方もできますが、オーディオの立体音響再生という観点からは、再現可能な音場が 2D から 3D に繰り上がり、音像定位可能な空間が格段に広くなったという画期的な出来事となります。

このような 3D 再生フォーマットの一つが Dolby Atmos です。ここでは、Dolby Atmos を例に取り、3D 再生対応のスタジオの音響設計に関して紹介します。




【図 1】1D → 2D → 3D への再生音場の変遷

3D 再生環境の構築を検討するためには、まずは「オブジェクトベース再生」に関して理解しておく必要があります。

従来の立体音響再生では、多数の音を再生可能な数個のチャンネルまでトラックダウンし、それを制作マスタとして各スピーカから再生していました。このような立体音響の再生方式を「チャンネルベース再生」と呼びます。

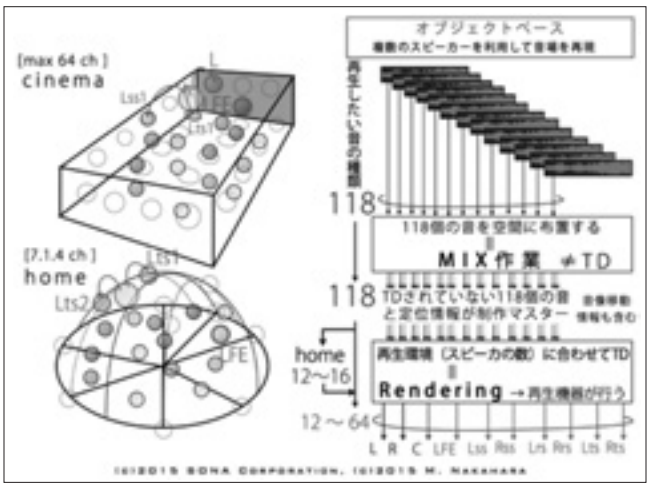
チャンネルベースにおいては、トラックダウンがミキシングエンジニアの主要な制作作業となり、音場再現の互換性を保つためには、制作環境と同じようにスピーカを配置する必要があります。

一方、近年増えている立体音響再生の手法が「オブジェクトベース再生」です。

オブジェクトベースでは、どのスピーカから何の音を再生するかでは無く、何の音を「どこから」再生するかといった、音の空間布置作業が、いわゆるミキシングエンジニアの制作活動となります。すなわち、オブジェクトベースにおける制作マスタは、各スピーカ用にトラックダウンされた音源では無く、再生したい音とその空間定位情報（移動情報含む）となります（【図 2】）。

それらの制作マスタの音をどのスピーカから再生するのかといったトラックダウン作業は、オブジェクトベースでは、再生機が行うことになります。例えば、映画館ではシネマ

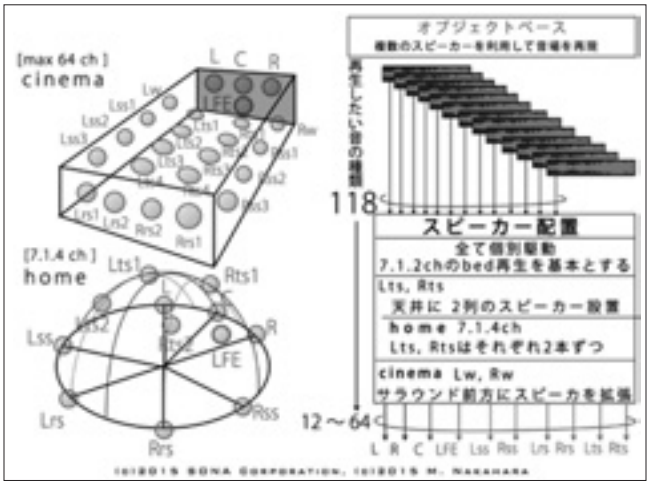
プロセッサやシネマサーバ、一般家庭ではAVアンプがトラックダウンを行います。再生機は、それぞれの再生環境に応じたトラックダウンを行うため、例えば天井スピーカが無いなど、再生スピーカ数が異なる空間においても出来る限り元の音場が再現できるように工夫します。このような再生機によるトラックダウン作業を「レンダリング」と呼びます（【図2】）。



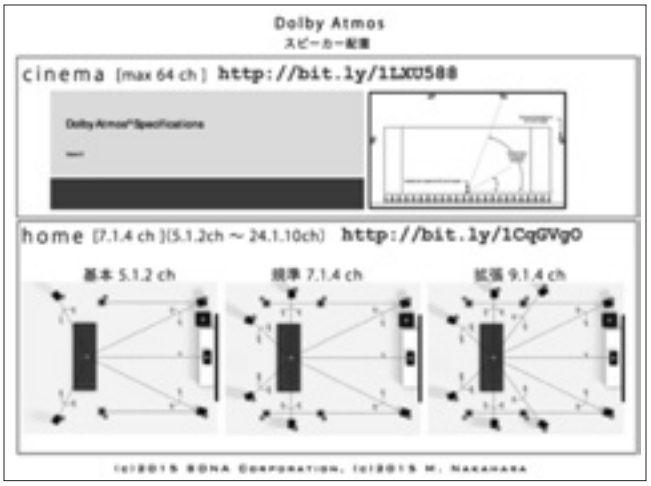

【図2】オブジェクトベース

Dolby Atmosの特徴の一つは、「チャンネルベース」も「オブジェクトベース」も混在した音響制作が可能な点です。チャンネルベースとしては、7.1chサラウンド（L, C, R, Lss, Rss, Lrs, Rrs, LFE）に天井の2ch（Lts, Rts）を加えた7.1.2ch（計10ch）が基本となっています。この7.1.2chにトラックダウンされたチャンネルベースの音素材に対して、最大118個（118ch）の音をオブジェクトベース再生として加えることができます。この合計で最大128chの音は、シネマプロセッサー（映画館）やAVアンプ（一般家庭）に内蔵されたDolby Atmosのレンダラーで、最大64台（映画館）や35台（一般家庭）など再生環境のスピーカ数に応じてレンダリング再生されます（【図3】）。

尚、最大で118個のオブジェクト素材ですが、Blu-ray DiscなどAVアンプによる再生においては、処理能力との兼ね合いから、現状では一旦12～16程度のチャンネルにまとめられたものが制作マスタとなります(【図2】)。Dolby Atmosのスピーカ配置に関しては、Dolby社から提供されている資料を参考にして下さい（【図4】）。




【図3】Dolby Atmosにおけるチャンネルベースと
オブジェクトベースの混合



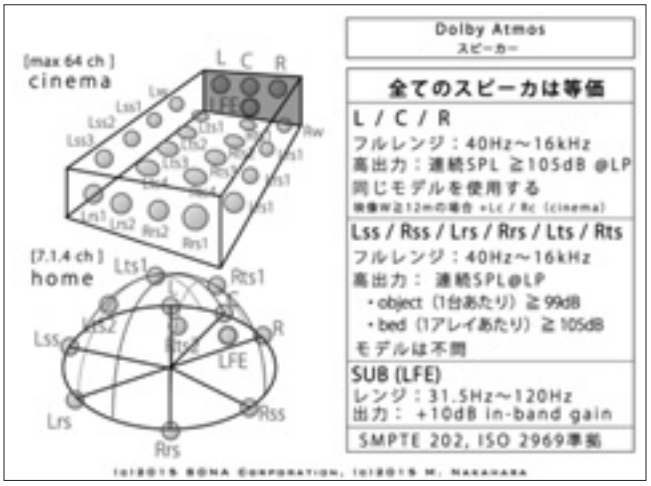

【図 4】Dolby Atmos のスピーカ配置（上：シネマ、下：ホーム）

Dolby Atmos では、以上のような 3D オブジェクト再生を実現するために、再生スピーカに関して以下のような規定があります（【図 5】）。

(1) スクリーンスピーカもサラウンドスピーカも、全てのスピーカが 40Hz ～ 16kHz のフルレンジ再生能力を有していなければならない（サラウンドだけ小型などは基本的には NG）。

(2) サラウンドスピーカの 1 台ずつが、スクリーンスピーカと同等の再生パワーを有していなければならない（複数のサラウンドスピーカで音圧をまかなうといった考え方は基本的には NG）。

上記は、Dolby Atmos に限らず、複数のスピーカを個別に駆動して 3D 音場を再現する手法に関しては共通の事項です。このように、3D 再生、オブジェクト再生の時代が到来し、スクリーンスピーカとサラウンドスピーカとの垣根が正式に取り払われたことになります。




【図 5】Dolby Atmos 再生用スピーカの推奨性能

例えば映画館などでは、建物等の物理的な制約により上記のスピーカの条件を満足することが困難となる場合があります。その場合、Dolby Atmos では、以下のような回避策

が用意されています。

(1) サラウンドスピーカの低域再生能力が不足している場合、左右1台ずつのサブウーファを後方に設置し、それらでサラウンドの低域を代替再生することができる。すなわち、サラウンドのベースマネージメント再生です。

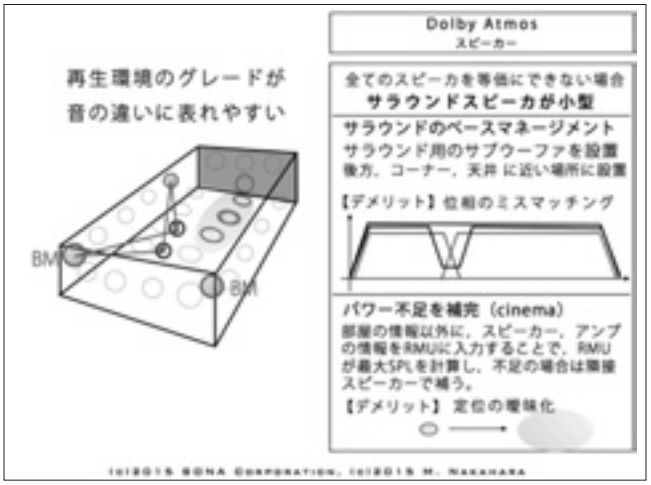
(2) サラウンドスピーカの再生音量が不足している場合、その近傍のサラウンドスピーカからも音を再生し、再生音量の不足をカバーすることができる。

上記によりDolby Atmosでは、小型のスピーカをサラウンドに使用する場合でも、破綻せずに3D再生が可能となっています。但し、その際には、以下のようなデメリットが発生することになります（【図6】）。

(1) ベースマネージメントでサラウンドスピーカの低域を補完した場合、聴取位置の違いによりサラウンドスピーカとサブウーファからの距離が変化するため、クロスオーバ周波数における裁量な位相条件を広範囲で実現することが困難となる。

(2) サラウンドスピーカの再生音量を複数スピーカで補完してしまうと、本来はピンポイントで定位するはずの音像がぼやけた大きな音像になってしまう。

以上のように、3Dオブジェクト時代の再生環境においては、スピーカの品質が、音質だけではなく空間分解能の違いとなって反映されてしまいます。




【図6】全てのスピーカを等価な性能にできない場合の
対応策とデメリット

次に、beBlue AOYAMAのStudio 0（以下beBlue Studio 0）の音響設計に関して紹介させて頂きます。

beBlue Studio 0は、ハリウッド地域以外では世界で初めてホーム用のDolby Atmosの制作が、マスターファイルの作成まで可能なスタジオとして誕生しました。Dolby Atmosの制作スタジオは、シネマ用とホーム用の二種類が存在しますが、ホーム用に関しては、「Atmos Sound Design Studio」と呼称しています。

またbeBlue Studio 0は、Dolby Atmosだけではなく同時にTHX社のスタジオ認証プログラムであるpm3（Professional Multichannel Monitoring and Mixing）も満足してい

るという、世界でもトップクラスの音響性能を誇る3Dオーディオスタジオです。

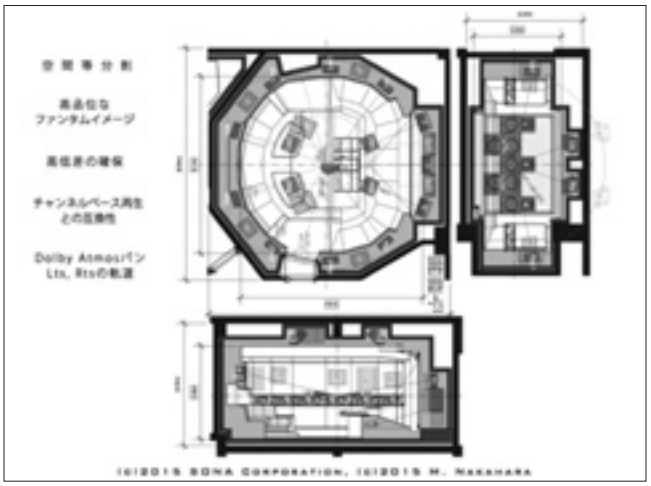
beBlue Studio 0の基本計画ですが、当初はまだホーム用のDolby Atmosは発表されていないものの、将来を見越して天井にスピーカをインストールする計画で最初から設計を進めました。その際、スピーカ配置に関してヒントになったのは、その前年に日本で初めてのDolby Atmos対応のダビングスタジオ（東映 DUB1）をDolby社と一緒に設計させて頂いた経験でした。ダビングスタジオでは、映画の再生環境という制約（映画館らしいスピーカ配置である必要性）から、3D音場再現に特化した形でのスピーカ配置の実現は困難です。そこで、beBlue Studio 0では、ダビングスタジオでは実現できなかった私案ベースにスピーカ配置の検討を行いました。

スピーカ配置の設計もほぼ完成したころ、Dolby Atmosのホーム用規格が発表され、beBlue Studio 0においてもその環境を導入することが決定しました。その結果、Dolby Atmosホームの規格、THX pm3の認証プログラム、我々の考えた3D再生環境の3つの要素を融合する音響設計作業が、「Dolby」「THX」「SONA」の3社の国際協力で始まることになります。

最終的なスピーカ配置ですが、結果的には我々の考えた案がDolby及びTHXにほぼ認められました。Dolby社及びTHX社からアドバイス頂いた修正事項は、Lw及びRwのスピーカを少し（2.5°）L及びRに近づけるといった点だけでした。

以上により決定したbeBlue Studio 0の11.1.4chスピーカ配置を【図7】に示します。ここでのスピーカ配置のポイントは以下となります。

(1) 高品位な2π 3D音場再現を実現するための空間等分割配置。
(2) 高品位なファンタム音像を再現するための仰角設定。
(3) 十分な高低差を確保したトップスピーカ。
(4) 上記を満足しながらも、多種のサラウンド再生フォーマットとの互換性を確保。
(5) 上記を満足しながらも、Dolby Atmosの空間パンニングと音像移動との互換性を確保。




【図7】beBlue AOYAMA Studio 0の11.1.4chスピーカ配置

以上のスピーカ配置を実現するために使用したスピーカは、スウェーデンのProcella（プロセラ）というメーカのTHX認証スピーカです（【図8】）。Procellaのスピーカは、全てのモデルのツイータにダイレクトラジエータではなくコンプレッションドライバが採用されている点が設計ポリシーの一つであり、それによりコンパクトな筐体ながらも歪みが少なく正確で高出力な再生が可能なスピーカとなっています。

また、HF/MFとLFとが分離されている（【図8】P8 + LF815）、メインだけではなくサブウーファも薄型である、パワードとパッシブの双方の仕様が選択出来るなど、限られ

た空間にフルレンジ再生スピーカを多数設置するといった場合に非常に有用なスピーカです。

beBlue Studio 0では、建物の積載荷重問題をクリアーするために、サブウーファを含む全てのスピーカにパッシブタイプを用いており、アンプは一括してマシンルームに設置しています。

音響透過型スクリーンの背後には、L, C, R用にP815（P8 + LF815）が1台ずつ、LFE用にP18が2台設置されています（【図9】）。天井含むサラウンドスピーカは、合計12ch分となりますが、P8（HF/MF）が12台、LF815が6台、壁面及び天井にインストールされています（【図10】）。ここでは、スペースの関係から、隣り合う2chで1台のローボックス（LF815）を共有しています。このようなインストールが可能である点が、Procellaの利点の一つでもあると言えます。

以上により、beBlue Studio 0では、合計26台のスピーカ（サブウーファ含む）を使用し、11.1.4chの20Hz～20kHzのフルレンジ再生をベースマネージメント無しで実現しています。

【図8】使用スピーカ

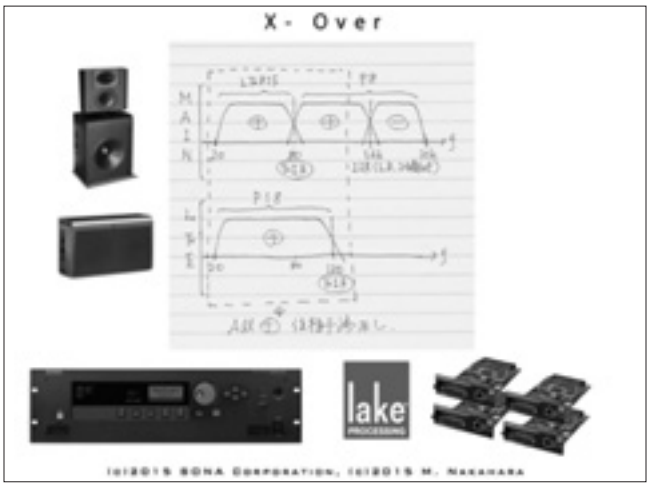
【図9】スクリーンスピーカ、LFE

【図 10】サラウンドスピーカ（壁及び天井）

beBlue Studio 0 では、B-chain プロセッサとして Yamaha 社の DME64N を 3 台使用していますが（常に fs=96kHz 駆動）、クロスオーバやルーム EQ などの処理に関しては、DME64N のコンポーネントではなく 4 台の LAKE プロセッサカード（MY8-LAKE）で行っています。

beBlue Studio 0 では、サブウーファ（LFE）以外の全てのスピーカを同じ構成としているので、全てのチャンネルに対して位相干渉の無い完全なファンタム定位を再現することが可能です。しかしながら、サブウーファ（LFE）に挿入する fc=120Hz の LPF を通常の IIR タイプにしてしまうと、メインチャンネルと LFE との間に位相干渉が生じてしまいます。この位相干渉は、メインチャンネルの LF と MF（LF815 と P8）のクロスオーバに同じく IIR タイプのフィルタを使用していると更に複雑となります。

以上の障害を回避するために、beBlue Studio 0 では、メインチャンネルのクロスオーバ（LF/MF）と LFE の LPF に LAKE プロセッサ（MY8-LAKE）による直線位相 FIR フィルタを採用しています。これにより、メインチャンネルだけではなく LFE まで含んだ全てのチャンネルにおいて位相干渉の排除された完全な再生が可能となっています。



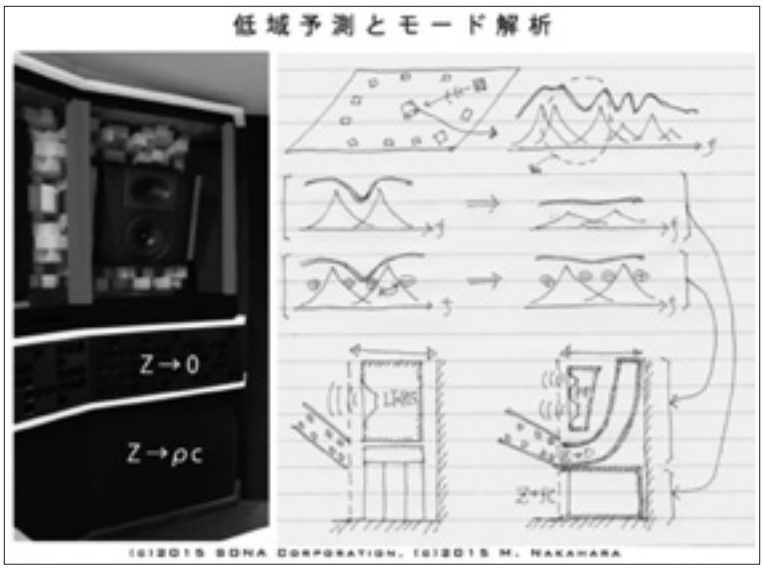

【図 11】LFE まで含んだ全てのチャンネルで位相干渉を排除

以上のように、beBlue スタジオは、部屋のあらゆる場所から 20Hz の超低域再生が可能な 11.1.4ch のスピーカがインストールされたスタジオです。それを現実のものとして実現するためには、スピーカの性能だけでは無く、室内音響的な性能が大変重要となります。

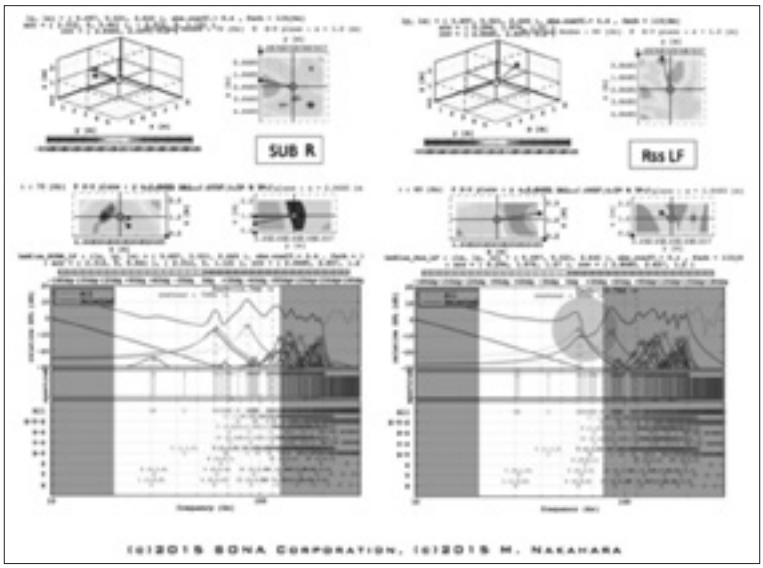
ある場所（S）で再生した音をある場所（P）で聴いた時の低域特性は、部屋という閉空間では、部屋の低域共鳴現象であるモードの重なりで形成されます。すなわち、部屋で再生したスピーカの低域特性を聴くと言うことは、部屋のモードEQの重ね合わせを聴いているということになります（【図12】）。

我々は、設計過程において全てのチャンネの低域特性を予測したうえで、さらにそれらの特性をモードEQに分解し、音響障害となっている原因のモードを突き止め、その対応策を検討するようにしています。

【図13】は、サブウーファ（左図）とRss（右図）チャンネルの低域特性を予測計算した結果ですが、Rssチャンネルに対して比較的顕著なディップが予測されています。このディップを回避するために、beBlue Studio 0の壁面には、ディップを生み出しているモードの位相を変更するための音響処置を施しています（【図12】Z→0）。次に、サブウーファの予測結果に関しては、ピークが多少目立つ程度の障害ですので、それらのピークを抑えるための低域吸音機構を壁面の音響処理に追加しています（【図12】Z→ρc）。




【図12】部屋の低域特性を構成するモードEQとその対策



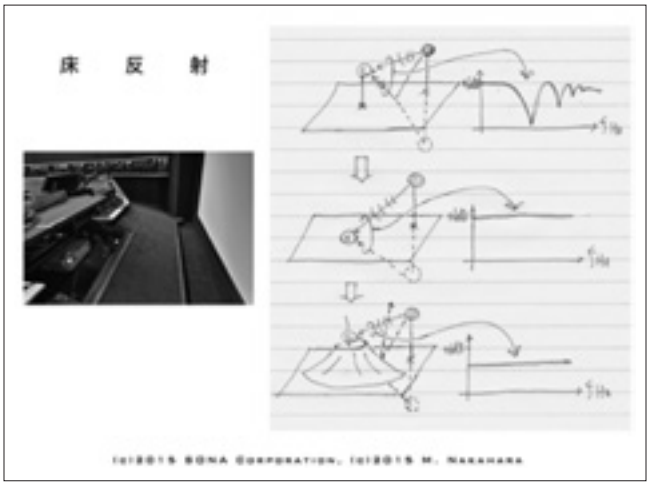

【図13】低域特性の予測計算とモード分解

壁や天井の音響性能を完全なものにできたとしても、最後に床だけは強烈な反射面として存在してしまいます。

この床からの反射音は直接音と干渉し、スタジオのモニタ特性に対して100Hz～200Hz近辺の低域に顕著なディップを発生させてしまいます（【図14】右上段図）。このディップは、低域に発生する障害のため、床をカーペットに変更する程度の吸音では、ほとんど改善効果が得られません。

床からの反射の影響を排除してスピーカからの音を聞くためには、自分が床に埋まって（床面上で）音を聞けば良いと言うことになります（【図14】右中段図）。この場合、周波数特性はフラットになりますが、現実的な解決策にはなり得ません。

beBlue Studio 0では、リスニングポイント周辺が山の尾根となるよう、コンソールテーブルの周囲に床までのスロープを設けています（【図14】左写真）。この場合、仮想的にリスニングポイントを床ごと持ち上げたような状況となり、床に埋まって（床面上で）音を聞いているのと同じような条件となります（【図14】右下段図）。これにより、床反射による低域のディップを回避し、安定した低域特性を実現しています。また、beBlue Studio 0では、単焦点プロジェクタをこのスロープ内に埋め込むことで、天井のスピーカ配置や音響特性を犠牲にすること無く、プロジェクタ投影を可能としています（【図14】右写真）




【図14】床反射と低域に発生するディップの関係

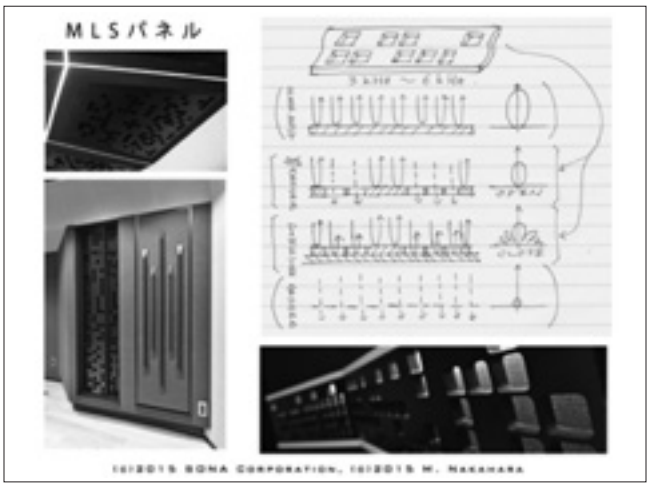
中高域の音響設計に関しては、MLSパネルと呼んでいるオリジナル設計の拡散・吸音パネルを、スピーカ再生音の反射音分析をもとに適材適所に使用しています。

MLSパネルは、あるアルゴリズムのもとに計算された配列に基づいて開口が設けられた音響パネルです。このパネルの特徴は、開口部を吸音すると45%吸音の吸音パネルとして作用し、開口部の裏側を塞ぐと1オクターブ（ここでは3kHz～6kHz）のディフューザーとして作用する音響可変の性質を有しているところです（【図15】）。

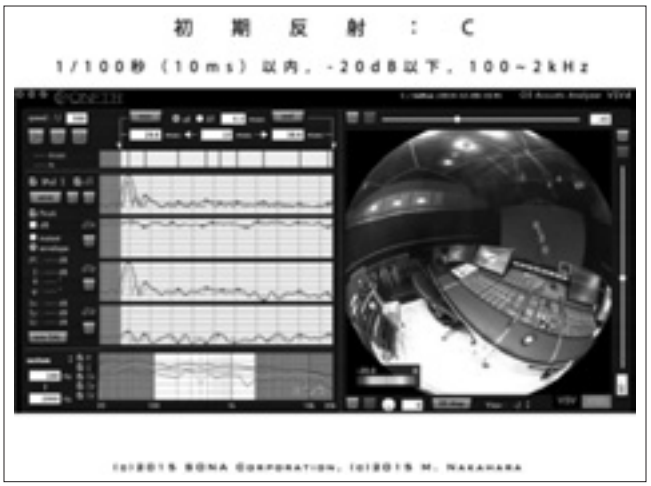
beBlue Studio 0では、このMLSパネルをサラウンドアレイの干渉の緩和、リスニングエリアの拡大、録音ブースの音響可変などの目的で使用しています（【図15】）。

このようなパネルの導入は単純な吸音処理に比べスタジオのコスト負担が大きくなりますので、その効果を最終的な聴感確認だけではなく測定により実証させて頂くことは、音響設計の重要な責務であると考えています。そのためには、精密な反射音の測定技術が必要となりますが、我々は三次元インテンシティーをパノラマ映像と結び付けて解析表示するVSVと呼ばれる手法を使用しています（VSV（Virtual Source Visualizer）は、九州大学の尾本教授とオンフューチャー（株）で開発している反射音の可視化技術です）。

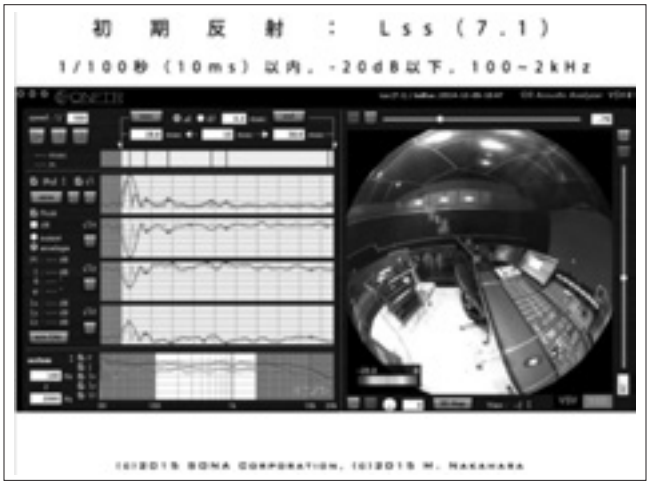
【図 16】は、センタスピーカから音を再生した場合に、直接音が到来した後の 10ms の間に生じる反射音を測定解析した結果です。測定結果からは、コンソールの反射以外には目立った反射音が発生していないことが分かります。L/C/R に関しては、余分な初期反射音は設けず直接音が明確に再生されることを音響設計としては目指していましたので、意図通りの結果が得られていると判断できます。




【図 15】MLS パネルの使用例と音響可変性能




【図 16】反射音到来方向解析（C スピーカ、10ms 以内の初期反射）

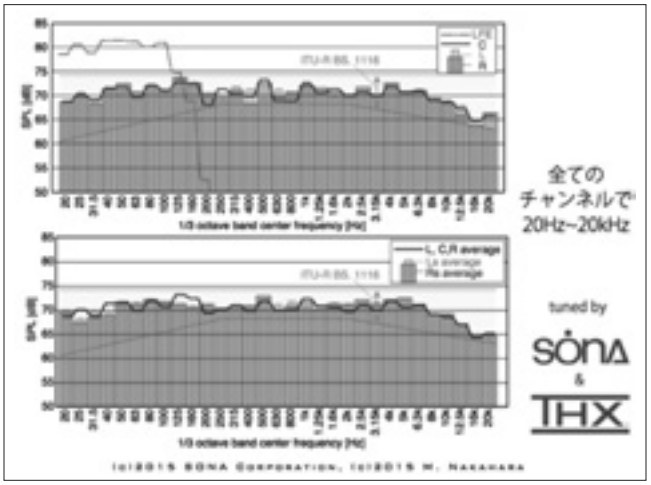



【図 17】反射音到来方向解析（Lss スピーカ、10ms 以内の初期反射）

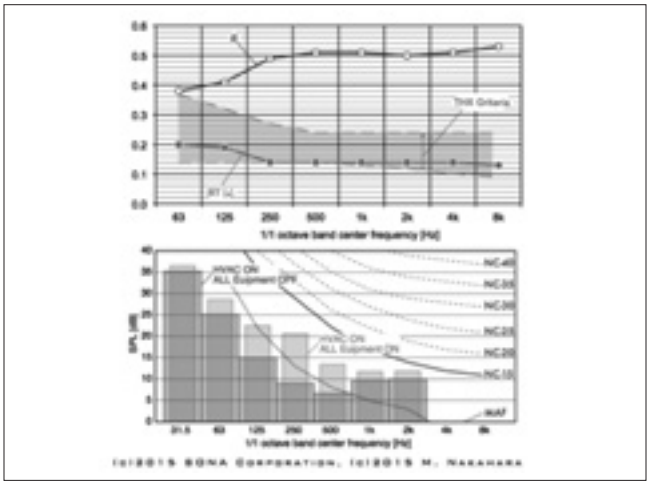
【図 17】は、サラウンドスピーカの一つである Lss スピーカから音を再生した場合の測定解析結果です。センタスピーカの場合と異なり、直接音（①）が到達した直後に天井に設置した MLS パネルからの反射音（②）が得られていることが分かります。これにより、サラウンドアレイの干渉の緩和やリスニングエリアの拡大用として天井面に設置した MLS パネルが、設計意図通りの拡散反射を与えていると判断できます。

以上の音響設計により得られたモニタ特性が【図 18】となります（5.1ch 再生時）。我々と THX のエンジニアとで実施したルーム EQ 調整が反映された結果になりますが、全ての再生チャンネルに対して 20Hz ～ 20kHz の広帯域かつフラットな特性が、ベースマネージメント無しで得られていることが確認できます。

【図 19】は、残響時間（平均吸音率）と室内暗騒音レベル（NC 値）の測定結果です。残響時間（RT ●）に関しては、THXpm3 の規準のほぼ下限においてフラットな特性となっています。平均吸音率 α を算出した結果が○のグラフになりますが、平均吸音率はほぼ 0.5 でフラットとなっています。低域において多少吸音が減りますが、それでも 63Hz で約 0.4 の値を保っています。一般的に吸音過多になりがちな高域に関しても顕著な吸音率の上方は見られず、ほぼ 0.5 を保っています。この測定結果から、beBlue Studio 0 においては、低域における吸音処理と高域における反射処理が適切に実現できていると解釈できます。




【図 18】モニタ特性（5.1ch 再生時）



【図 19】残響特性・室内暗騒音レベル

室内暗騒音レベル（NC 値）に関しては、コントロールルームの空調機だけではなく、プロジェクタ等の機材を全て ON にした状態で NC15 をクリアーしています。実際の音響制作は機材を ON にした状態で実施されますので、このように機材も空調も稼働した状態で静粛な環境を実現することは、スタジオの性能にとっては重要なことだと思います。

最後に、Dolby 社の Douglas Greenfield 氏と THX 社の Steven　Martz 氏のコメントを紹介させて頂き、締めくくりたいと思います。

【Douglas Greenfield 氏（Dolby Lab.）より】
ドルビージャパンの中山さんから図面を頂いたとき、中原さんのプランだと言われなくても僕はあなたの作品だと言うことに気がついたでしょう。このデザインは、まさに中原さんらしい。細部にわたって注意の払われた厳密な音響設計です。語弊を恐れずに言わせて頂けば、中原さんのオーディオファンとしての愛情（特にスピーカーに対する）を露呈してしまったデザインと言うこともできるでしょう。
私は、中原さんのデザインを同僚に見せました。彼は、我々の 9.1.4ch のアトモススタジオを設計した人です。その彼が言ったのは、シンプルに「これはすごい」でした。
（2014 年 6 月 26 日）

【Steven P. Martz 氏（THX Ltd.）より】
中原さんのプランを見ました。私が言った宇宙船というジョークは嘘では無かったようです。
これは、とても挑戦的（実験的）なデザインです。3 種類の業界のスタンダード、THX、ドルビーアトモス、ソナを一つの場に融合させようとしているようにみえます。それは、たやすいことではありません。しかし、我々はこれまで何年間もいくつもの染谷スタジオプロジェクトというサラウンドフィールドですごいことをやってきました。染谷さんのスタジオを実現する度に、地平線を少しずつ遠くまで拡張してきたのです。
今回は、アトモスを取り入れることによって、さらに別の大きな飛躍を成し遂げることになると思います。
（2014 年 6 月 14 日）

# 第 12 回 JAPRS 認定「Pro Tools 技術認定試験」実施報告

９月６日（日）、札幌×２、盛岡、仙台、郡山、新潟、東京×８、横浜、名古屋×２、大阪×３、広島、博多、鹿児島の 12 地区 23 ヶ所の団体受験会場に分散して、「第 12 回 JAPRS 認定 Pro Tools 技術認定試験」が実施されました。本年度の受験者数は、昨年度の 502 名に対して 564 名という結果となりました。

また、今回の試験については、昨年と同様に受験者個々の Pro Tools に関する知識をより明確に把握するために、初級 50 問（500 点）、中級 50 問（500 点）の出題構成とし、それぞれ「Pro Tools 概要」「録音・編集」「ミキシング」「シンク・MIDI・用語集など」に区分された出題としたが、初級問題の正答率は 72.5％、中級問題については 62.5％、全体的な正答率は 65％という結果になりました。以下の通り実施結果の詳細を報告致します。

専門学校札幌ビジュアルアーツ

専門学校デジタルアーツ仙台

（１）受験申請者 692 名　欠席 128 名　受験者 564 名
　　最低点 250 点　最高点 1,000 点（３名）　　総合平均点 674.3 点

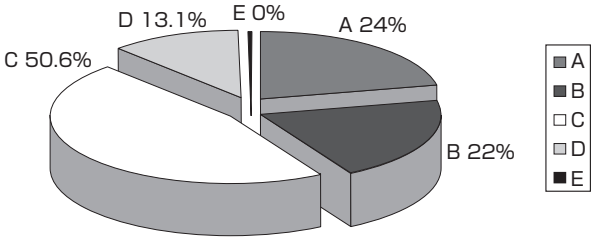
（２）平均点詳細
　　初級１（Pro Tools 概要／ 120 点）：101.2 点
　　初級２（録音・編集／ 130 点）：88 点
　　初級３（ミキシング／ 110 点）：70.1 点
　　初級４（シンク・MIDI・用語集など／ 120 点）：87.8 点
　　◆初級計 363.2 点
　　中級１（Pro Tools 概要／ 130 点）：89.6 点
　　中級２（録音・編集／ 120 点）：76.5 点
　　中級３（ミキシング／ 130 点）：71.5 点
　　中級４（シンク・MIDI・用語集など／ 120 点）：73.4 点
　　◆中級計 311 点

（３）得点別人数

| | |
|---|---|
| 1000 ～ 900 | 67 名 |
| 890 ～ 800 | 82 名 |
| 790 ～ 700 | 103 名 |
| 690 ～ 600 | 106 名 |
| 590 ～ 500 | 110 名 |
| 490 ～ 400 | 75 名 |
| 390 ～ 300 | 19 名 |
| 290 ～ 200 | 2 名 |
| 200 ～ | 0 名 |
| 計 | 564 名 |

（４）ランク別人数

| | | |
|---|---|---|
| Aランク | 1000 ～ 901 点 | 55 名 |
| B　〃 | 900 ～ 701 点 | 183 名 |
| C　〃 | 700 ～ 451 点 | 270 名 |
| D　〃 | 450 ～ 201 点 | 56 名 |
| E　〃 | 200 点以下 | 0 名 |
| 計 | | 564 名 |



# AES ジャパンコンファレンス・名古屋 2015
# 3D オーディオの可能性／ワークショップレポート

JAPRS　技術委員長
高田 英男

1．テーマ
3D オーディオの現状と未来

2．概要
世界的に「没入感」をテーマに 3D オーディオが注目されている。このワークショップでは 3D オーディオの様々なフォーマットの基本理念解説、及び実際の制作手法について各ジャンルのプロフェッショナルが解説を行い、3D オーディオの将来展望についてパネルディスカッションを行う。

3．期日・パネラー・平成 27 年 9 月 12 日（土)、名古屋芸術大学

コーディネータ　深田　晃　　（株）dream window
パネリスト

| | |
|---|---|
| 小野　一穂 | NHK |
| 中山尚幸 | Dolby japan（株） |
| 橋本裕充 | 東京工芸大学 |
| 胡桃沢啓司 | （株）テレビ朝日 |
| 佐々木健護 | NHK |
| 山口朗史 | NHK メディアテクノロジー |
| 高田英男 | フリーランス・エンジニア |
| 岸　智也 | （株）カプコーン |
| 瀧本和也 | （株）カプコーン |
| 杉山　篤 | 日活（株） |

4．プレゼン内容

① NHK 22.2ch マルチチャンネル
音場空間表現として「下段」「中段」「上段＋頭上」3 層に 22 個のスピーカーを配置し、360 度の立体音響空間を形成する。
制作手法としては 22.2ch 収録用野外録音の専用マイキングスタンドなど開発し録音研究を進めている。
会場の試聴ルームでは 85 インチの 8K ディスプレーで 22.2ch による、高画質＋リアリテーある 3D サラウンド再生が行われた。

② Dolby Atmos
基本チャンネルベースでは無くオブジェクト（高さ　位置情報）を用いた音源を座標指示し表現する 3D オーディオである。
最大 128ch のオブジェクト音源を最大 64 個のスピーカーで再生が可能であり、映画館での体験をホームシアターに適応させるレンダリングプロセッサーにて家庭でも 3D オーディオが楽しめる。

今回、私から音楽ソフトによる Dolby Atmos 7.1.4ch ミキシングについてプレゼンをした。試聴ルームではブルーレーディスクにオーサリングされたソフト（映画・音楽）など 3D オーディオ効果が明確に伝わるデモが行われた。

③ Auro-3D
欧州の映画館にて広がりを見せている 3D オーディオシステム。
Auro-3D エンジンには Auro-Codec デコーダーや Aoro-Matic アップミキサーが含まれており、3D 音響の制作、編集、再生など全て対応出来る。
又、Auro-Matic アップミックス・アルゴリズムはモノ、ステレオ、サラウンドのコンテンツを 3D 音響に変換可能。又、従来音楽制作におけるマシスタリング作業も対応可能との事。試聴室ルームではジェレネックスピーカーにより自然で広がりのあるクラシック音源をデモされていた。

④ ゲーム 3D オーディオ
（株）カプコーンによりゲームソフトにおける 3D オーディオについてプレゼン。ゲームソフトはデータ容量との戦いでもあり、素晴らしい 3D システムでも容量が多ければ実装出来ないなど、現実的な問題を指摘しながらも、3D オーディオへの期待についてプレゼンされ、デモ体験コーナーではバーチャル 3D 映像ゲームのデモが行われていた。

⑤ 3D Sound
試聴室において ECLIPSE スピーカーにて 9.1ch のナチュラル音源による 3D オーディオの試聴デモを行っていた。高さを表現するハイトチャンネル用マイキングなどを用いた深田晃氏、入交英雄氏らの制作による、自然で美しい響きの 3D オーディオが印象に残った。

⑥ wave field synthesis（WFS）
サラウンド部屋の真中のスイートスポットを無くし、部屋の度の位置にいても最適なサラウンド体験が出来るシステム。
専用プロセッサーによる音源データを、小さな点音源スピーカーを多数使い平面波を再現する事で 3D オーディオが再生出来る（WFS）について、コーディネータ深田　晃氏より説明される。

5．その他のワークショップ等

• オランダ、ポリヒムニアのジャン＝マリー・ヘイセン氏によるレコーディングワークショップ
クラシックのサラウンド録音に関する考え方を Pyramix の画面と再生により解説。

• サラウンド制作への取り組み
名古屋の放送局等の制作者によるサラウンドや３D への取り組みの現状の報告。

• 吉田保氏によるミックスダウンセミナー
名古屋芸大のスタジオ内でミックスダウンセミナーを行われた。

6．まとめ

「没入感」をテーマとした3Dオーディオワークショップは大変興味深いテーマであり、テレビ、映画、音楽、ゲームなどそれぞれの制作プロが3Dオーディオの魅力～可能性についてプレゼンをした。更に会場内3Dオーディオ専用試聴室ではそれぞれのシステムで創られたソフトが試聴出来、従来のサラウンドの表現力を超えた「没入感～高さ」も感じる3Dオーディオを楽しむ事が出来た。

映画の世界では映像と連動した超刺激的3Dオーディオにより、作品の世界に入り込める感覚を体験し、音楽では美しいホール音場空間が素晴らしいアコーステック録音により、アーティストの感情までがより伝わる3Dオーディオの魅力を体験する事が出来た。私達が日常普通に体験している事は3Dオーディオの世界であり、3Dオーディオについて不自然な感覚は無かったが、自然な3Dオーディオにしても、意図的な3Dオーディオにしてもシステムを効果的に使うノウハウ（マイキング～音創り）を追求するエンジニア力の大切さを、改めて感じた次第である。

又、ＡＥＳアワード（芸大生による録音技術審査～顕彰）や懇親会など、若い力による新たなエネルギーを感じたＡＥＳ名古屋であった。

# 第 27 回 JAPRS ゴルフコンペ

10 月 16 日（金）、昨年に続き神奈川県厚木市の大厚木カントリークラブ桜コースにおいて、第 27 回目を迎えた JAPRS ゴルフコンペが開催された。参加者は JAPRS 法人正会員 9 社 13 名、個人正会員 1 名、賛助会員 5 社 7 名、JAPRS 会員 OB 3 名、関連会社等 6 名 合計 8 組 30 名で、早朝 7:30 に全員遅刻者もなくクラブハウスの受付が完了しました。

当日は、残念ながら朝から雨模様で、8：15 の全体集合の際、毎年恒例の集合写真を撮りましたが、降雨の関係でキャディーバッグ置き場の横の小スペースでの写真撮影となってしまいました。

8:33 に IN、OUT 同時スタートでコンペが始まり、一日雨中でのプレイとなりましたが、プレイ終了後、クラブハウス 2F のパーティ会場において成績発表が行われ、優勝はテイチクエンタテインメントの佐藤尚氏で早くも、JAPRS コンペで 2 回目の優勝となりました。以下に主な成績を記載いたします。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 優　勝：佐藤 尚 氏／テイチクエンタテインメント | GROSS 79 | NET 70.6 |
| 準優勝：伊藤 猛 氏／バーディハウス | 〃 84 | 〃 72.0 |
| 3　位：菊地 功 氏／ミキサーズラボ | 〃 108 | 〃 74.4 |
| ベストグロス：佐藤 尚 氏／テイチクエンタテインメント | GROSS 79 | |

佐藤 尚 氏

雨の中での佐藤尚氏のスコアと、準優勝となった伊藤猛氏の後半 OUT の 38 というスコアは、本当に素晴らしいものでした。来年第 28 回の JAPRS ゴルフコンペには、より多くの皆様がご参加下さいますよう、お願い申し上げます。

# Inter BEE 2015 賛助会員社ブースツアーレポート

株式会社メディア・インテグレーション
岡田 詞朗

2015 年 11 月 18 日（水）から 11 月 20 日（金）の 3 日間に渡り、幕張メッセ（千葉市美浜区）にて第 51 回 2015 年国際放送機器展が開催されました。昨年の第 50 回の際、過去最多となる出展者数と伝えられていましたが、本年度も更に出展者数記録更新し、出展者数 996 社・団体（うち海外 31 カ国・地域から 540 社）で 1,780 小間が幕張メッセの 1 ～ 6 ホールで展開されておりました。（余談ですが、次年度 2016 年は更に展示数が増え、1 ～ 8 の幕張メッセ全てを展開しての開催が決定しているそうです。東京オリンピック効果でしょうか。）

映像では、昨年から顕著に表れている 4K/ 8K への超高精細度化が、各社の機器は元より、そのソフトウェアの在り方において具体的に明示され始めたのが今回からだと思われました。昨今話題になることの多い、放送の在り方をこれからどのようにしてゆくかをより具体性を持って語られる時期に入ったことを実際に感じ取る事が出来たと思います。

そしてオーディオでは、こちらも昨年に引き続き様々なデジタル・ソリューションの展示は元より、その反動（？）としてか様々な～特に新製品の～アナログ機器展示が増加していたように思ったのは私だけでしょうか。

ただ映像もオーディオも機器展示に関して言えば、様々なソリューションが存在し群雄割拠的な様相を呈してきており、どの組み合わせが自分にとってベスト・マッチなのか？の答えを見つけ出すには、相当な労力を強いられることが否めないのが現状と思われます。

それら膨大な情報を甚だ微力ではありますが、会員の皆様に分かりやすく且つ効率よくお伝えすること、スタジオ関係者と賛助会員の交流が普段特に若い世代で以前よりも少なくなっていることの解消をするという 2 つの目的のために実施、今年で 3 回目となる「Inter BEE 2015 賛助会員社ブースツアー」を今年も開催させて頂きました。

今年は昨年ご参加頂いた賛助企業数から 3 社増えた総計 19 社を対象に 11 月 19 日（木）にツアーを実施させて頂きました。昨年まではスタートから休みなく全ての対象企業を回る行程でしたが、本年度は前後半に分け、途中昼食を挟む形で実施となりました。結果的にはこの方法が好評で、展示会特有の疲労感が減少、メリハリがついて最初から最後まで集中力が保てたと思われます。ただこれまで同様参加人数の少なさが課題として残っており、特に目的の 2 つ目である比較的若い世代のスタジオ関係者と賛助会員の交流は残念ながら目標を達成出来なかったのも事実です。

ただ慣れのせいもあり、今後どのように実施すれば円滑なツアーが実施出来るのか、ヒントは随所で得る事が出来ました。技術委員会との提携、事前の詳細情報告知等次年度の開催に向けて賛助委員会で検討を重ねていきたいと思います。

最後になりますが、ご協力頂きました事務局の方々、賛助会員各社のご担当者様、そしてツアーに参加頂いた方々、ありがとうございました。

Inter BEE 2015 賛助会員社ブースツアー参加賛助会員 19 社（うち正会員 1 社）

アビッド テクノロジー株式会社
株式会社アイコニック
株式会社エムアイセブンジャパン / 株式会社シンタックスジャパン

オタリテック株式会社
株式会社オーディオテクニカ
カナレ電気株式会社
有限会社グルーヴ
株式会社 サンフォニックス
株式会社静科
スチューダー・ジャパンーブロードキャスト株式会社
ゼンハイザージャパン株式会社
ソリッド・ステート・ロジック・ジャパン株式会社
高橋建設株式会社
タックシステム株式会社
株式会社トライテック
日本音響エンジニアリング株式会社
ヒビノインターサウンド株式会社
株式会社メディア・インテグレーション
メモリーテック株式会社

# 第22回日本プロ音楽録音賞授賞式レポート

「日本プロ音楽録音賞」は、平成５年に当協会が制定した「JAPRS録音賞」を出発点とし、音楽制作、録音に対する認識を高め、音楽産業の更なる質の向上、録音技術者の地位の確立などを目的として、平成６年より実施されているものです。

今回第22回目の実施にあたり、一般社団法人日本音楽スタジオ協会および一般社団法人日本オーディオ協会、日本ミキサー協会、一般社団法人日本レコード協会、一般社団法人演奏家権利処理合同機構MPNの５団体が主催し、経済産業省の後援および日本放送協会、一般社団法人日本民間放送連盟、株式会社ステレオサウンドの協賛、サウンド＆レコーディング・マガジン、ＣＤジャーナル、ステレオサウンド、プロサウンド、レコード芸術の賛助、並びに（株）JVCケンウッド・ビクターエンタテインメント、（株）ソニーミュージック・コミュニケーションズ、(株) サウンドインスタジオ、オタリテック（株)、(株) ミックスウェーブ、東放学園音響専門学校の協力により「第22回日本プロ音楽録音賞」を実施し、平成27年12月４日（金)、目黒雅叙園４Ｆ「孔雀」に於いて授賞式、４Ｆ「花苑」に於いてパーティーが開催され、受賞作品および受賞者の発表が行われました。

内沼 映二･運営委員長

今回の授賞式も「音の日」のイベントとして開催され、はじめに内沼会長が運営委員長として開会の辞を述べられ、続いてプロ音楽録音賞に対し後援を得ている経済産業省 商務情報政策局 文化情報関連産業課 課長補佐 伊藤桂氏が来賓代表として挨拶された後、６部門計16作品およびベストパフォーマー賞並びに、審査委員特別賞、新人賞について表彰が行われました。

応募作品の分類については以下の通りとし、審査は以下の６部門およびベストパフォーマー賞、新人賞を対象に行われ、全100作品の応募からＣＤ部門「クラシック、ジャズ、フュージョン」：３作品、ＣＤ部門「ポップス、歌謡曲」：３作品、ハイレゾリューション部門「2chステレオ」：４作品、ハイレゾリューション部門「マルチchサラウンド」：２作品、放送部門「2chステレオ」：２作品、放送部門「マルチchサラウンド」：２作品がそれぞれ優秀作品としてノミネートされ、その中から各部門１作品が最優秀作品として選定され、ベストパフォーマー賞１作品、新人賞１作品が選ばれました。

経済産業省･伊藤 桂氏

ＣＤ部門　クラシック、ジャズ、フュージョン / 応募総数：22作品
ＣＤ部門　ポップス、歌謡曲 / 応募総数：22作品
ハイレゾリューション部門（2chステレオ）/ 応募総数：25作品
（SACD、DVD、BD＆ノンパッケージ作品）
ハイレゾリューション部門（マルチchサラウンド）/ 応募総数：７作品
（SACD、DVD、BD＆ノンパッケージ作品）
放送部門（2chステレオ）/ 応募総数：17品
（ラジオ番組：ＡＭ、ＦＭ、衛星放送）（テレビ番組：地上波、衛星放送）
放送部門（マルチchサラウンド）/ 応募総数：７作品
（テレビ番組：地上波、衛星放送）
審査員特別賞
ベストパフォーマー賞
新人賞

今回は、各部門の最優秀作品、優秀作品および審査委員特別賞、新人賞、ベストパフォーマー賞を紹介するとともに、最優秀作品として表彰された代表エンジニアの方々および審査員特別賞の代表エンジニア、ベストパフォーマー賞のアーティスト、新人賞の代表エンジニアにアンケートを依頼し、受賞の感想、作品のコンセプトについてコメントをいただきましたので、52頁以降に掲載させていただきます。

# 第22回日本プロ音楽録音賞
# 授賞式次第

## 一、主催者代表挨拶

第22回日本プロ音楽録音賞　運営委員長
一般社団法人日本音楽スタジオ協会　会長　内沼　映二

## 二、ご来賓ご挨拶

経済産業省　商務情報政策局
文化情報関連産業課　課長補佐　伊藤　桂　様

## 三、最優秀作品・優秀作品の発表及び表彰並びに審査員講評

ＣＤ部門　クラシック、ジャズ、フュージョン
一般社団法人日本オーディオ協会　会長　校條　亮治
株式会社ＪＶＣケンウッド・ビクターエンタテインメント
サウンド・プロデューサー　高田　英男

ＣＤ部門　ポップス、歌謡曲
一般社団法人日本レコード協会　理事　畑　陽一郎
日本ミキサー協会　理事長　吉田　保

ハイレゾリューション部門　２ｃｈステレオ
一般社団法人日本音楽スタジオ協会　会長　内沼　映二
株式会社ＪＶＣケンウッド・ビクターエンタテインメント
サウンド・プロデューサー　高田　英男

ハイレゾリューション部門　マルチｃｈサラウンド
日本ミキサー協会　理事長　吉田　保
一般社団法人日本音楽スタジオ協会　監事　清水　三義

## 四、ベストパフォーマー賞の発表及び表彰並びに審査員講評

一般社団法人演奏家権利処理合同機構ＭＰＮ　副理事長　松武　秀樹
理事長　椎名　和夫

## 五、最優秀作品・優秀作品の発表及び表彰並びに審査員講評

放送部門　２ｃｈステレオ
日本放送協会放送技術局制作技術センター　専任局長　熊井　秀哲

放送部門　マルチｃｈサラウンド
日本放送協会放送技術局制作技術センター　専任局長　熊井　秀哲
音響ジャーナリスト
株式会社マクス　代表取締役　加藤　茂樹

## 六、新人賞の発表及び表彰並びに審査員講評

一般社団法人日本音楽スタジオ協会　会長　内沼　映二

## 七、受賞者代表挨拶

ハイレゾリューション部門　２ｃｈステレオ　最優秀賞
ミキシング＆マスタリング・エンジニア
株式会社カメラータ・トウキョウ　髙島　靖久

以上

**ＣＤ部門 「クラシック、ジャズ、フュージョン」**
（写真は☆印の代表エンジニア）

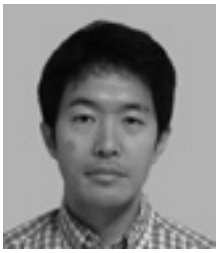
［最優秀賞］
**■作品「BIG BAND SCALE ～甦るビッグバンドサウンド～」（WQCQ-633）より**
**「地下室のメロディー」角田健一ビッグバンド CD**
発売元：株式会社ワーナーミュージック・ジャパンより発売

**☆ミキシング・エンジニア：内沼　映二**
（株式会社ミキサーズラボ）

〈受賞のことば〉
この度は、第22回「日本プロ音楽録音賞」CD部門クラッシク、ジャズ、フュージョンにて最優秀賞という栄誉ある賞を選定頂きまして誠に有難うございました。
BIG BANDシリーズは、今回で第３弾目になります。ビッグバンド・サウンドを良い音でを目標に制作してきたわけですが、第１弾では今では懐かしい？ DVD-Audioを採用していましたが、時代の流れを感じます。
このパッケージはＣＤ・ＳＡＣＤハイブリッドで発売しています。当然ハイレゾリューションを視野に入れて、ミックスはアナログ・ハーフインチ、96kHz/32bit、DSD11.2M、5.6Mと４種類のメディアを選択する事で、現在考えられるハイレゾリューションに対応しています。
今回のＣＤ・ＳＡＣＤハイブリッド盤のマスタリングをどのメディアを選択するか何回も聴いてみました。どのメディアもそれぞれ特徴があり、特にDSDはきめ細かく滑らかで優しいサウンドは、クラシック的なオーケストラであれば間違いなくDSDを選択したのですが、ビッグバンド・サウンドの場合、躍動感、迫力感、極太なサウンド等が望ましいと考えております。
角田氏（角田健一ビッグバンド・リーダー）および制作スタッフで出した結論は、全員一致でアナログ・ハーフインチがベストと言う事になりました。
記録メディアも時代とともに進化を遂げ、ますます高品位のサウンドが提供できるようになり、音楽ジャンルによってメディアを選択できる事は我々エンジニアにとって素晴らしい事と思います。
これからも、Hi-Fiを追求しつつ、音楽的にも優れた作品創りを目標に精進したいと考えます。今回この様な栄誉ある賞を頂き、この作品創りに携わった多くの方々に厚く御礼を申し上げます。

**○マスタリング・エンジニア：菊地　功**　（株式会社ミキサーズラボ）
**○セカンド・エンジニア：髙西　和明**　（株式会社ミキサーズラボ）
**○セカンド・エンジニア：山口　雄**　（株式会社ミキサーズラボ）

［優秀賞］
**●作品「モーツァルト：ピアノ協奏曲第９番《ジュノム》＆第２７番」（COGQ-76）より**
**「ピアノ協奏曲第９番 変ホ長調 K.271《ジュノム》から第１楽章」**
**ヴァレリー・アファナシエフ（ピアノ）円光寺雅彦 指揮 読売日本交響楽団 CD**
発売元：日本コロムビア株式会社



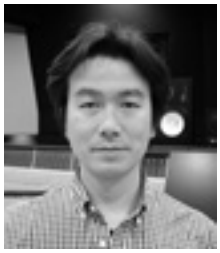
☆マスタリング・エンジニア：毛利　篤　（日本コロムビア株式会社）
○ミキシング・エンジニア：塩澤　利安　（日本コロムビア株式会社）

**●作品「Dear Mr. SINATRA」（SICP4438）より**
**「I'm A Fool To Want You featuring**
**エンディア・ダヴェンポート、溝口肇」 TOKU CD**
発売元：Sony Music Labels Inc.

☆ミキシング＆マスタリング・エンジニア：鈴木　浩二
（株式会社ソニー・ミュージックコミュニケーションズ）
○レコーディング・エンジニア：米山　雄大
（株式会社ソニー・ミュージックコミュニケーションズ）

**ＣＤ部門 「ポップス、歌謡曲」**
（写真は☆印の代表エンジニア）

［最優秀賞］
**■作品「こううたう」（VICL-64295）より「桜坂」 柴咲コウ　CD**
発売元：株式会社 JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント



☆ミキシング・エンジニア：高桑　秋朝
（株式会社 JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント ビクタースタジオ）

〈受賞のことば〉
この度は、第 22 回日本プロ音楽録音賞　CD 部門ポップス・歌謡曲にて、最優秀作品に選定頂き誠にありがとうございます。
この作品は、柴咲コウさんのカバーアルバム「こううたう」に収録されている一曲です。
アレンジ谷口尚久さんによる本作の Rec&Mix を担当させて頂きました。
今回、初めて柴咲さんのレコーディングに参加させて頂いたのですが、声の素晴らしさはもちろん、表現力のある Vocal にとても感動しました。
生楽器は W.Bass と GG のみで打ち込みが中心のオケですが、谷口尚久さんの作るトラックはとても美しく、楽しく Mix に集中する事が出来ました。
Mix 時は、柴咲さんの Vocal を中心に、「森の中で歌っているような幻想的な雰囲気」をめざして、空間表現に特にこだわって作業にあたりました。
全体で過度な処理はせず、より素直に素材の良さをお届け出来るよう努めました。
今回は ProTools 内部での Mix でしたが、メインのリバーブ、メインのトラックにアウトボード機を使用する事で、より立体的なサウンドになったのではないかと思っています。
最後に、アレンジ谷口尚久さん、マスタリング川崎洋氏、スタジオの皆さん、そしてこのアルバム制作に尽力されたスタッフの皆様に改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。

ビクタースタジオ　高桑 秋朝

○**マスタリング・エンジニア：川﨑　洋**　（FLAIR MASTERING WORKS）

［優秀賞］

**●作品「Kiss The Sun」（COCB-54173）より「Time After Time」SHANTI CD**

発売元：日本コロムビア株式会社

☆**ミキシング・エンジニア：谷田　茂**
（株式会社 JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント ビクタースタジオ）
○**マスタリング・エンジニア：川﨑　洋**
（FLAIR MASTERING WORKS）
○**レコーディング・エンジニア：山田　幹朗**
（株式会社 JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント ビクタースタジオ）
○**レコーディング・エンジニア：渡邊　佳志**
（株式会社 JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント ビクタースタジオ）

**●作品「もっと光を」（KSCL2536）より「LIFE」BLUE ENCOUNT CD**

発売元：Sony Music Labels Inc.

☆**ミキシング・エンジニア：髙山　浩也**
（株式会社ソニー・ミュージックコミュニケーションズ）
○**マスタリング・エンジニア：阿部　充泰**
（株式会社ソニー・ミュージックコミュニケーションズ）
○**アシスタント・エンジニア：房野　哲士**
（株式会社ソニー・ミュージックコミュニケーションズ）

**ハイレゾリューション部門　「2ch ステレオ」**
（写真は☆印の代表エンジニア）

［最優秀賞］

**■作品「平和への祈り～バッハ：無伴奏ヴァイオリン全曲」より**
**「無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第２番ニ短調 BWV1004 第５楽章「Chaconne」」　千住　真理子（ヴァイオリン）フォーマット：96kHz/24bit**

発売元：ユニバーサルミュージック合同会社　　配信元：e-onkyo music

☆**ミキシング＆マスタリング・エンジニア：**
**髙島　靖久**
（株式会社カメラータ・トウキョウ）

〈受賞のことば〉

この度は最優秀賞という栄誉をいただき、誠にありがとうございます。

我々エンジニアの仕事は、楽曲作品の意図、演奏アーティストの思いや理想、プロデュ

ース担当者のコンセプト等をまとめ、音として形に仕上げる責任を担っています。完成時の喜びもありますが、過程での苦労も多くあります。出来て当り前の評価を受け難い仕事ですが、このような賞は、また新たな目標への活力として大きな励みになると感謝しております。

今回の受賞できた要因は、千住真理子さんの名演奏によるところが大きいと感じています。彼女が2002年に出会った幻の名器、ストラディバリウス・デュランティによる20年振りの同曲再録音という事もあり、特別な意気込みを感じていました。私も前回を越えるサウンドにしなければという思いに駆られました。

録音現場である草津国際音楽の森コンサートホールは、静寂な国有林の中にあり、更に録音中は譜面灯のみで、他すべての電力機器を切ることで良好なS/N比が得られ、ハイレゾレコーディングによる広ダイナミックレンジ、高解像度を十分生かすことができた事も成功要因の一つだったと思います。

これからも音楽家が奏でるリアルなサウンド、感動を与える音楽を録音で伝えていくために、一層の努力を重ねていきたいと改めて思いました。

最後に、日本プロ音楽録音賞運営委員会の皆さまには厚く御礼申し上げます。

髙島 靖久

［優秀賞］

**●作品「天使のハープ」より「美しい知らせ」ナポリ古謡**
**西山　まりえ　フォーマット：DSD11.2MHz/1bit**
発売元：NAXOS JAPAN　　配信元：e-onkyo music

**☆ミキシング・エンジニア：深田　晃**　　（株式会社 dream window）

**●作品「TOMA Ballads 4」より「What Are You Doing The Rest Of Your Life」**
**苫米地　義久　フォーマット：96kHz/24bit**
発売元：TOMA MAUSIC　　配信元：e-onkyo music、VICTOR STUDIO HD-MUSIC

**☆ミキシング・エンジニア：高田　英男**　（フリーランス）
**○マスタリング・エンジニア：袴田　剛史**
（FLAIR MASTERING WORKS）
**○アシスタント・エンジニア：八反田　亮太**
（株式会社JVCケンウッド・ビクターエンタテインメント ビクタースタジオ）

［審査員特別賞］

**●作品「超絶のスーパーガムラン ヤマサリ」より「ウジャン・マス」ヤマサリ**
**フォーマット：DSD11.2MHz/1bit**
発売元：（株）ハイパーソニック研究所　　配信元：e-onkyo music

**☆レコーディング＆ミキシング・エンジニア：**
**大橋　力**
（公益財団法人国際科学振興財団）

〈受賞のことば〉

音楽配信全体からするとマイノリティに違いないガムランを録音した作品が審査員特別賞に選ばれましたことを、光栄にまたうれしく思います。

バリ島のガムラン音楽は、「ハイレゾのための音楽」といって過言ではありません。なぜなら、人類の創った音を楽しむ人工物のなかでも、日本の琵琶や尺八と並んで、その響きが人間の可聴域をこえる超高周波をこよなく豊かに含んでいるからです。この超高周波は脳の快感の回路〈報酬系〉を刺戟して聴く人の陶酔感を高めるとともに、自律神経系・免疫系・内分泌系を活性化して健康を増進させる効果が期待されます。まさに人類の音の至宝です。それはしばしば150kHzを超え、200kHzに達することさえあります。これを完全なかたちで記録再生できるのは、ハイレゾだけです。こうしたガムランサウンドを捉えるために私たちは、2013年以来、11.2MHzマルチトラックDSDレコーダーを独自に開発して、現地録音を行ってきました。そして幸いにも、バリ島屈指のアンサンブル“ヤマサリ”の名演の奇蹟的な録音に成功したのが受賞作品です。ハイレゾでなければ伝えられない“神々の島”バリ島からのメッセージを、これまでになく忠実にお届けできたのではないかと思います。とはいえこれは、音楽ジャンルとしても録音配信技術としてもマイノリティに属する仕事です。そうした辺境にも十分に目を配って評価くださった審査員のご見識の高さに敬意を表し、感謝の言葉といたします。

大橋 力

**ハイレゾリューション部門 「マルチ ch サラウンド」**

（写真は☆印の代表エンジニア）

［最優秀賞］

**■作品「イタリア・オペラ管弦楽・合唱名曲集」より「ヴェルディ：歌劇《運命の力》より序曲」アンドレア・バッティストーニ指揮　カルロ・フェリーチェ歌劇場管弦楽団＆合唱団　SACD　5.0ch**

発売元：日本コロムビア株式会社

**☆マスタリング・エンジニア：毛利　篤**

（日本コロムビア株式会社）

〈受賞のことば〉

この度は最優秀賞にご選定いただきまして、誠にありがとうございます。

若手指揮者注目株の筆頭と目されるようになったバッティストーニが、手兵のカルロ・フェリーチェ歌劇場管弦楽団を率いて、十八番であるイタリア・オペラの名曲をエネルギッシュに奏でています。この演奏には、他所では聴くことのできない本場の香りのようなものが随所に漂っています。若い才能溢れる指揮者と楽団、歴史ある劇場の一つ一つが合わさって実現した演奏だと思います。

録音会場はイタリアでもトップクラスの水準にある名門歌劇場ですが、S/N条件、マイクセッティング等の制約もあり、必ずしも好条件とは言えなかったようです。しかし、歴史ある劇場での独特な響きを的確に捉え、最新の音楽ホールの音響とは明らかに異なる、本場ならではの味のある音場となっています。マスタリングでは、この本場の香りがリアルに伝えられるように、ごくシンプルなイコライザ処理を施しました。

今回の受賞にあたり、難しい条件の下、神業的なレコーディング・ミキシングをしていただいた塩澤さん、プロデューサーの馬場さん、アシスタントのゲルハルト・ベッツさんをはじめ、この作品に関わった全ての皆さんに感謝申し上げます。

**○ミキシング・エンジニア：塩澤　利安**　（日本コロムビア株式会社）

［優秀賞］

**●作品「The Art of Fugue BWV-1080」より「Contrapunctus 01」**
**UNAMAS FUGUE QUINTET　フォーマット：192kHz/24bit 5.0ch**
発売元：UNAMAS レーベル　配信元：e-onkyo music

**☆ミキシング＆マスタリング・エンジニア：沢口　真生**
（沢口音楽工房）

**放送部門　「2ch ステレオ」**
（写真は☆印の代表エンジニア）

［最優秀賞］

**■作品「Dear ピアノフレンズ～親愛なるピアノ仲間たち～」より「Daisy」**
**歌：澤田 かおり 指揮：服部 隆之 演奏：澤田かおり＆ならピ♪オーケストラ**
株式会社毎日放送　ＨＤＴＶ　stereo　2015 年２月２日放送

**☆ミキシング・エンジニア：田中　聖二**
（株式会社毎日放送）

〈受賞のことば〉

大変栄誉ある賞を頂き誠にありがとうございます。ミキシング・エンジニアとして今後の励みになります。

今回の曲の収録においては、とにかく、ボーカルを含め全ての楽器が本来の音に聴こえ、演奏の質の良さを音質でも表現できるようにマイク選定とマイク位置を決定しました。

とはいえ、PA を伴う LIVE 演奏、ミキシングバランスを大きく崩す希望しない音のかぶりは避けるという基本に忠実なマイキングを行いました。

極力､コンタクトマイクは使用せず（全く使用しないという勇気はありませんでしたが）楽器そのものの本来の音が収録できるオフマイクをよい位置に立て、ボーカルのバックで流れる演奏の良さが引き立つような収録を試みました。

アンビエンスマイクの位置はボーカルの音が濁ることなくミキシングでき、お客さんの拍手のみを収録するマイクとしてでなく、アンビエンスを程よく混ぜることによりホールトーンが成立するような位置に配置し、ミキシングしました。

収録、ミキシングにおいては技術的に特別な事を行ったわけではありませんが、澤田かおりさんという素敵なボーカリストの声が自然に伸びやかに、そして、服部隆之先生指揮のならピ♪オーケストラの演奏がナチュラルかつダイナミックに視聴者の皆様に届くような音づくりを試みました。

○チーフ・ステージフロア：**大川　宏明**　（株式会社毎日放送）

［優秀賞］

**●作品「ブラボー！オーケストラ」より**

**「サン＝サーンス作曲 バイオリン協奏曲第３番ロ短調作品 61 より第３楽章」**

**ティエリー・フィッシャー：指揮　三浦　文彰：バイオリン　名古屋フィルハーモニー交響楽団**

日本放送協会　ＦＭ　stereo　2015 年 8 月 30 日放送

☆ミキシング・エンジニア：**矢神　彰人**（日本放送協会名古屋放送局）
○セカンド・エンジニア：**佐藤　勝彦**　（日本放送協会名古屋放送局）
○アシスタント・エンジニア：**裏地　結衣**　（株式会社Ｅ＆Ｃテック）
○アシスタント・エンジニア：**宮本　和也**　（株式会社Ｅ＆Ｃテック）

**放送部門　「マルチ ch サラウンド」**

（写真は☆印の代表エンジニア）

［最優秀賞］

**■作品「2014 サイトウ・キネン・フェスティバル松本」より**

**「ベルリオーズ：幻想交響曲 第４楽章 断頭台への行進」**

**小澤 征爾指揮　サイトウ・キネン・オーケストラ**

長野朝日放送（株）　ＨＤＴＶ　5.0ch　2014 年 12 月 23 日

☆ミキシング・エンジニア：**岩井　和久**

（長野朝日放送株式会社）

〈受賞のことば〉

この度は、「第 22 回日本プロ音楽録音賞」 放送部門　マルチ ch サラウンド最優秀賞に選出していただきまして、審査員の方々はじめ、スタッフの皆様に感謝いたします。

DPA の無指向性マイク 7 本からなるメイン・マイクとミレニア HA の組み合わせで収録しました。補助マイクの使用を極力抑えた後処理無しの現場での一発録りです。この作品は、収録と同時に全国 10 ヶ所でサラウンドでのパブリックビューイングがあり、いつもとは違う緊張感・集中力で臨めたことが良い結果に繋がったと思います。収録は放送クオリティーを超える「96khz24bit」サラウンドで収録しました。そして、演奏家のパフォーマンスの素晴らしさが良い結果を生んだ最大の要因です。

サイトウキネンを収録し始めた頃から、毎年のように応募し続けましたが、毎回落選。一級品の素材を生かしきれない自分の力量の無さに毎年不甲斐ない思いでいっぱいでした。

周りの皆様のご指導、激励が今回の受賞に繋がりました。

今回の受賞に驕ることなく「テレビの良い音」を追求していきたいと思います。ありがとうございました。

小澤征爾氏が音楽監督を務めるサイトウ・キネン・フェスティバルは 2015 年から名称が変更になり、「セイジ・オザワ・マツモトフェスティバル　OMF」になりました。

○セカンド・エンジニア：都鳥　真　　（長野朝日放送株式会社）
○セカンド・エンジニア：斉藤　祐司郎　（株式会社ＳＣＩ）

［優秀賞］
**●作品「プレミアムシアター / 二期会公演 歌劇「魔笛」モーツァルト作曲」より**
**「第１幕 第８曲 フィナーレ：「早く行きましょう、勇気を出しましょう」～「ザラストロ、万歳！」デニス・ラッセル・デーヴィス：指揮、宮本亜門：演出**
**妻屋秀和、鈴木准、森谷真理、他 読売日本交響楽団**
日本放送協会　ＨＤＴＶ　5.1ch　2015 年 8 月 31 日放送

**☆ミキシング・エンジニア：山縣　淳一**
（株式会社 NHK メディアテクノロジー）
**○セカンド・エンジニア：矢嶌　諭**　（株式会社ネオテック）

**ベストパフォーマー賞**
**■作品「挑戦！ブラバン少女」より「華麗なる舞曲 」**
**精華女子高等学校吹奏楽部**
発売元：Sony Music Labels Inc.

**アーティスト：精華女子高等学校吹奏楽部**

〈受賞のことば〉
ベストパフォーマー賞という素敵な賞を頂き、本当にありがとうございます。
当初は、プロのミュージシャンの方々がたくさん活動をされる世界において、いち高校生の部活が CD リリースということだけでも大変驚きでしたが、めったに経験出来ない大きなチャンスを頂けたということで、部員一同、一生懸命頑張りました。
特に「華麗なる舞曲」は難曲と言われる曲で大変苦労もしましたが、まさに、「挑戦！」したことでこのような光栄なる賞を頂けたことを大変うれしく思っております。
今後も、たくさんの方に精華女子高等学校吹奏楽部の音を聞いて頂けるよう頑張りますのでどうぞよろしくお願い致します。

**新人賞**
**■作品「o1」（SECL 1760 ～ 1）より「s-AVE」 SawanoHiroyuki［nZk］ CD**
発売元：Sony Music Labels Inc.

**☆ミキシング・エンジニア：相澤　光紀**
（合同会社 SIGN SOUND）

〈受賞のことば〉
この度は、第 22 回日本プロ音楽録音賞の新人賞に選出して頂いて、大変光栄に思っています。
本作品は、ドラマ・アニメ・映画などの映像の音楽“劇伴”を中心に活躍する澤野弘之さんのボーカル楽曲に重点を置いたプロジェク

トSawanoHiroyuki［nZk］の1stAlbumの中の一曲で、Vocalistにソロアーティストとして活躍されているAimerさんを迎えています。

楽曲自体が良いのはもちろんですが、参加されたミュージシャンやVocalの演奏・表現が非常に力強くエモーショナルで、その感情も含めそのまま生かせるように心がけました。

歌モノの楽曲ではありますが、「ボーカルに負けないオケ、オケに負けないボーカルのバランス」を意識したサウンドを心がけました。

今回この素晴らしい作品の制作に携われた事に感謝しております。

今後もこれに驕らず、良い作品を作れるよう精進していきたいと思います。

## 審査委員会

| | | |
|---|---|---|
| 総合審査委員長　内沼　映二 | 副審査委員長 | 高田　英男 |
| 部ＣＤ部門 | 審査委員： | 内沼　映二、川澄　伸一、北川　照明、 |
| ハイレゾリューション部門 | | 椎名　和夫、塩澤　利安、清水　三義、 |
| | | 髙城　　賢、高田　英男、増田　　晋、 |
| | | 松尾　順二、松武　秀樹、三浦　瑞生、 |
| | | 森元　浩二、吉田　　保、脇田　貞二、 |
| | | 渡辺　昭人 |
| 放送部門 | 審査委員： | 加藤　茂樹、石野　和男、清水　幸男、 |
| | | 高橋　正勝、深田　　晃 |

（以上50音順）

今回の顕彰内容については、各部門の最優秀作品と優秀作品の制作に携わったミキシング・エンジニア、マスタリング・エンジニア及びベストパフォーマー賞のアーティストに表彰状とクリスタル製の表彰楯を贈呈し、セカンド・エンジニア、アシスタントエンジニアには表彰状を贈呈。また、審査員特別賞、新人賞についてはミキシング・エンジニアに表彰状とクリスタル製の表彰楯を贈呈。

なお、ＣＤ部門、ハイレゾリューション部門の最優秀賞については、優秀なスタッフと良好な環境を提供されたメインのスタジオについても表彰状とクリスタル製の表彰楯が授与された。

# 第 22 回日本プロ音楽録音賞 審査委員講評

## 〈ＣＤ部門　クラシック、ジャズ、フュージョン〉

株式会社 JVC ケンウッド・
ビクターエンタテインメント
サウンド・プロデュサー
高田 英男

CD 部門の審査顕彰につきましては昨年までクラシック部門とジャズ・フュージョン部門を分けて審査顕彰致しましたが、応募作品数などを考慮し、今年からクラシック・ジャズ・フュージョンを一つの区分と致しました。

今年度応募総数は 22 作品、昨年度は 19 作品でしたので少し応募数は増えました。

受賞されました作品について講評をさせて頂きます。

**●優秀賞**

作品「モーツァルト:ピアノ協奏曲第 9 番　ジュノム＆第 27 番」
楽曲「ピアノ協奏曲第 9 番　変ホ長調 K.271 ジュノムから第 1 楽章
ピアノ：ヴァリレー・アファナシエフ
円光寺 雅彦：指揮　読売日本交響楽団
ミキシング・エンジニア：塩澤　利安　日本コロムビア（株）
マスタリング・エンジニア：毛利　篤　日本コロムビア（株）
発売元　日本コロムビア（株）

塩澤さん毛利さんコンビは毎年受賞されており、今年度も見事に受賞されました。録音 2014 年 6 月　サントリーホール・ライブレコーディングです。

柔らかく深みのあるオーケストラサウンドと、美しい高音域の伸び～力強い低域までクリアーなピアノサウンドが大変分離良く録音されている事に驚きました。

毛利さんのコメントの一部をご紹介致しますと、音場的には力強い分厚いピアノサウンドに、重厚なオーケストラが重なり合い、稀有なアーティストに極限まで肉薄し、独自の視点で浮彫にした野心作との事です。

立上りの良いクリアーなピアノサウンドと、重厚なオーケストラサウンド、それぞれの音の世界が主張～融合したサウンドであり、塩澤さん、毛利さんの阿吽のコンビにより、演奏者の気魄が音に伝わる素晴らしい音創りと感じました。

**●優秀賞**

作品「Dear Mr.SINATRA」
楽曲「I'm A Fool To Want You featuring エンディア・ダヴェンポート、溝口肇」
アーティスト：TOKU
ミキシング＆マスタリング・エンジニア：鈴木　浩二
（株）ソニー・ミュージックコミュニケーションズ
レコーディング・エンジニア：米山　雄大
（株）ソニー・ミュージックコミュニケーションズ
発売元　Sony Music Labels Inc.

何と言っても TOKU さんのセクシーでリアルなヴォーカルサウンドが印象的であり、ブレスまでが声の魅力となって伝わってきます。

アコースティックピアノのリバーブ感と奥行きを感じるバランスにより、TOKU さんの歌声が更に印象的に伝わってきます。
サビから入ってきます女性ヴォーカリスト、エンディアさんの迫力ある歌声、溝口さんのリアリティーあるチェロの響きなど、作品の聴きどころを見事に音として表現される鈴木さんの感性＆技術力には、毎回凄いなと感じております。

鈴木さんコメント一部をご紹介致します。
今回のサウンド構成はヴォーカル中心に考えました。TOKU とエンディアのダイナミックで感情豊かな唄表現､溝口さんの妖艶に漂うチェロを立体的なサウンドに纏めました。
作品の魅力へと引き込まれる音創り、本当に素晴らしいと感じました。

**●最優秀賞**
作品「BIG BAND SCALE ～甦るビックバンドサウンド～」
楽曲「地下室のメロディー」
アーティスト：角田健一ビックバンド
ミキシング・エンジニア：内沼　映二　（株）ミキサーズラボ
マスタリング・エンジニア：菊地　功　（株）ミキサーズラボ
発売元：ワーナーミュージック・ジャパン

録音機器
Pro Tools HDX　Prism Sound ADA-8XR（A / Dコンバーター）
96kHz/32bit Flot 録音
CD/SACD マスターとしてアナログハーフインチ
10MHz　ルビジュームマスタークロックを使用。

アナログテープ録音の時代では音創りへの拘りとして、テープスピード・録音バイアス深さ・録音テープ種類などでそれぞれのノウハウで音創りをしていましたが、この作品への音創りの拘りとして、デジタル機材・アナログ機材の音質的ノウハウを熟知し、それぞれ音色を狙って機材選択し、音創りに生かしていると感じました。
最優秀賞を受賞されました「地下室のメロディー」では内沼さん独特の華麗なるストリングスサウンドを表現する為に、オケを 192kHz にフォーマット変換しストリングスを録音しているなど、最新デジタル技術と究極のアナログ的ノウハウの融合にて、音創りがなされております。
エンジニア力が音楽を創り出す凄さを痛感した次第です。
更に、マスタリングにおきましてもダイナミックレンジを充分に広く取りながら、メリハリのあるビックバンド・サウンドに纏められており、音と音楽を熟知したマスタリングの力を感じました。

**纏め**
パッケージメディアＣＤの音質も技術改革が進み、素晴らしいサウンド表現
が可能な今、充分なダイナミックレンジを上手く使い、より音楽の魅力を引き出す視点での録音制作が進んで行く事を願っております。
最後になりましたが、受賞されました皆様、本当におめでとうございました。

〈ＣＤ部門　ポップス、歌謡曲〉

日本ミキサー協会
理事長　吉田 保

去年に続き、今年も少し酷評になるかもしれませんが、バラード、ロックを含め、昨日家で波形を見ました。何故かすべて同じでした。音圧もあまり変わらず、CD の 16bit も限界がきているのかなあと感じますが、それぞれ作品ごとに特徴が出ていると思います。

まず優秀賞の「Time After Time」の講評ですが、声は男女ともにすっきりとした声がきちんと収録されていますが、少しマイクがオンマイクすぎて、リミッターの使い方がボーカルを録る上では非常に難しいのではないかと思います。特に男性の場合は、電気的に言いますともう 6dB くらい下げた方がリミッターがきちんとかかるのでは…。具体的に言っても仕方がないのですが、後でマスタリングの時にどうなってしまうのか、ということで、私もゴルフをやって長いのですが、ドライバーも 230 ヤードが限界となっていまして、CD も 16bit が限界か、あとはどうすれば良いのか、今後エンジニア共々マスタリングエンジニアも考えていかなければならない時期にきているかなと思っています。CD 自体はもう少し寿命が延びると思いますが、是非ともパッケージメディアとしてはやはり残していって欲しいメディアだと思います。メインボーカルに対しての先程の講評ですが、もう少し男性のボーカルが出ても良かったのではないかと思います。しかし、全体的には爽やかなサウンドで音創りがなされていると思います。

2 番目に聴きました優秀賞、BLUE ENCOUNT の髙山さん、まだ若いエンジニアですのでがんばってやっていただきたいと思います。デジタルのマキシマイザーなどをもう少し上手く使いこなすと、波形が潰れないでいいのかなあと思いますが、まだ 20 代のエンジニアさんですか？私ももうすぐ 70 でございますが、是非ともアナログからずっと勉強してデジタルもやって欲しいと思います。ロックというのはドラムのバランスというのが非常に重要になってきますよね。アンビエンスを録る時どうしてもベースドラムがオンの音像になってしまうバランスのとり方になり、スネアやハット、シンバルがオフ気味になりがちですが、是非ともベースドラム、スネアドラム、タム、シンバル、ハイハットが一体となったアンビエンスの表現が良いかもしれません。個人的な考えですがまあ昔で言いますと、パワーステーションというバンドがいましたね、ああいう感じで創っていただければと思います。我々もロックを録る時の課題としてベースドラム、スネアのバランス、どうしてもベースドラムがオンマイクになってしまい、それは致し方ないのですが、その辺を今後の課題として考えてやっていただければ、もっと一体感がある、アンビエンスのあるロック感が出るのではないかと思います。

最後ですが、柴咲コウさんの「桜坂」、これもすごくシンプルな編成で、打ち込みと生の音が上手く混ざりあった、なかなか素直な感じで、彼女自身のキャラクターもありますが、もう少し柴咲さんの顔と一体化された声のニュアンスが、私のイメージとちょっと違ったかな、という感じもありますが、全体的には非常にきれいなサウンドとなっております。ハモの部分は、アーティストか制作者の意図かわかりませんが、若干小さい感じで、一体感のあるハモの方が柴咲さんのキャラクターもきれいに出てくるのではないかなと思いました。

去年と今年、また酷評になってしまいましたが、3 作品ともに若手エンジニアから中堅エンジニアの世代の方ですので、がんばっていただきたいと思います。

ポップスや演歌も含めて、今年はミキサー協会の人が入っていなかったのが非常に残念ですが、また来年この賞に応募され、入賞していただきたいと思っています。今日はありがとうございました。

〈ハイレゾリューション部門　2ch ステレオ〉

株式会社 JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント
サウンド・プロデュサー　高田　英男

新譜のレコーディングにおいて、ハイレゾリューションフォーマットによる音楽制作が日常化している現状、今年度は新たに「ハイレゾリューション部門」を独立し、2ch ステレオとマルチチャンネルサラウンドの区分にて審査～顕彰する事と致しました。

今年度応募作品数ですが、e-onkyo music 様の推薦及び自薦を併せて 25 作品の応募がありました。（ノンパッケージ 23、パッケージ３）昨年度の応募作品は 24 作品ですので、昨年とほぼ同じ応募数で御座います。

音楽ジャンルもクラシック、ジャズ、ポップス、純邦楽、民族音楽と大変広がりがあり、各制作プロジェクトによりデジタルフォーマット / スペックをプログラム毎に考え、DSD11.2M ～ PCM96/24 まで、上手く使って録音制作をしている印象を持ちました。

受賞されました作品の講評

**●優秀賞**

作品「天使のハープ」より
楽曲「美しい知らせ」ナポリ古謡
アーティスト：西山まりえ　DSD11.2MHz/1bit
ミキシング＆マスタリングエンジニア：深田　晃　dream window
発売元：NAXOS JAPAN

2014 年 11 月　軽井沢コルネ録音（個人宅　響きの美しい部屋）
録音機材　Horus コンバーター + Pyramix
DXD352.8kHz/32bit 録音～ DSD11.2MHz

レコーディング風景を You Tube で見せて頂きましたが、アーティストがサウンド的な事は全てお任せ…大変リラックスした信頼関係の中で、繊細且つ深みのあるハープサウンドが表現されていると感じました。

特にハープは演奏する空間によって音色・響きが大きく異なる楽器です。応募作品は 17 世紀のハープとの事、ハープ独特の繊細さを表現する近接マイク、ホール全体の響きを生かし、位相特性を考慮したメインマイク、更にホールの響きを録音するアンビエントマイクにより、繊細で美しい独特の響きが表現されていると感じました。

深田さんのコメントをご紹介します。

古楽器のハープの繊細な響き、演奏者の思いを音として表現するためには、ハイレゾの器がふさわしいと考え、解像度の高い録音手法で、CD フォーマットではなかなか聞けない繊細な音を表現できたのではないかと思います。

アルバムは 5 台の異なるハープを使って演奏されておりますので、各ハープ独特の音色など楽しんで頂けたらと思います。

卓越した録音技術と、音楽への深い造詣を持つ深田さんならではのハイレゾサウンドと感じました。

**●優秀賞**

作品「TOMA Ballads4」楽曲「What Are You Doing The Rest Of Your Life」
アーティスト：苫米地　義久　96kHz/24bit
ミキシングエンジニア：高田　英男　フリー
マスタリングエンジニア：袴田　剛史　　FLAIR MASTERING WORKS
発売元：TOMA MUSIC

私自身の担当作品で御座いますので、アルバム制作のコンセプトをご紹介させて頂きます。

2014 年 8 月　VICTOR 302 STUDIO　96kHz/24bit ダイレクト 2ch 録音
サックスとピアノの完全デュオの演奏であり、音の鮮度に拘ったダイレクト 2ch 録音を提案し制作致しました。

シンプルな編成程、アーティスト自身から伝わる楽器の音色を如何に表現するか、更にデュオの演奏ならではのコール・アンド・レスポンスによって変化する音空間を、素直な音色感とリアリティーあるサウンドで纏める音創りをテーマと致しました。

ほんの少しのリバーブの変化や楽器バランスによって、演奏そのものが変わっていく緊張感を感じながらの録音でした。

又、マスタリングでは袴田さんにピアノソロのバランスを調整して頂き、デュオならではの音世界を創って頂きました。

苫米地さん独特の柔らかく深みのあるサックス、石塚まみさんの自然で透明感あるピアノサウンドによって創られる、優しくほっとする TOMA Ballads の音世界がハイレゾリューションサウンドで伝われば大変有難いです。

**●審査員特別賞**

作品「超絶のスーパーガムラン　ヤマサリ」
楽曲「ウジャン・マス」
アーティスト：ヤマサリ　DSD11.2MHz/1bit
レコーディング＆ミキシングエンジニア　大橋　力　（公益財団法人国際科学振興財団）
発売元：（株）ハイパーソニック研究所

大橋先生（芸能山城組の録音では山城先生）として、私自身が先生から音創りについて育てて頂きましたので、講評などする立場ではありませんが、ご指名でございますので今回特別に設けられました特別賞について、報告させて頂きます。

ハイレゾ２ch 部門ですが上位作品の評価は小数点の僅差であり、更にこの作品は大橋先生自ら開発した DSD11.2M のマルチレコーダーをバリ島に持込み、ガムラン音楽の最高峰パホーマンスを録音された作品です。

大橋先生は CD 発売当時からハイレゾリューションフォーマットによる音楽制作の重要

性を発表され、超高域帯域における人体への影響（ハイパーソニック効果）を発表されるなど、ハイレゾ音源制作の元祖的なお仕事をされて来られました。

今回の素晴らしいガムランサウンドの録音及びハイレゾリューションフォーマットによる長年の研究～音楽制作に対し、審査員特別賞として顕彰させて頂きました。

受賞されました「ウジャン・マス」ですが、ガムラン独特の超高周波の最高に豊かなバリ島ガムランの真価が、究極の解像力・深みのあるリアリティーサウンドとして立体的に表現されていると感じました。

**●最優秀賞**

作品「平和への祈り～バッハ：無伴奏ヴァイオリン全曲」
楽曲「無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第２番ニ短調 BWV1004」
アーティスト：千住　真理子　96kHz/24bit
ミキシング＆マスタリングエンジニア：高島　靖久　（株）カメラータ・トウキョウ
発売元：ユニバーサルミュージック（同）

2014 年 9 月　草津国際音楽の森コンサートホール
録音システム　ショップス無指向性マイク２本のワンポイントマイキング
～ジョン・ハーディー制作ヘッドアンプM -1 ～ emm Labs 社 ADC-8Mk Ⅳ～ Pyramix にて収録と非常にシンプルで音質変化を極力少なくなるシステムにて録音。
又、S/N 比を重視しホール機器電源を全てオフにし、照明用の電球を数個持込みし収録するなど究極の拘り録音です。

千住真理子さんが演奏しているヴァイオリンは 1716 年制作ストラディバリウスであり、制作されて約 300 年の間保管されていたもので、千住さんにより演奏されています。

ダイアモンドトーンと言われており、強く輝きのある音色です。演奏の強弱における音色変化や、超高域～低域までの繊細で豊かなヴァイオリンの音色感が心地良く伝わってきます。

高島さんコメントにもありますが、ヴァイオリンの音のリアリティーと静寂に消えて行く響きまでハイレゾリューションサウンドにより、見事に表現された素晴らしい録音と感じました。

**纏め**

今年度もハイレゾリューション部門を試聴させて頂き、音楽と録音技術の深い繋がりを感じ、ハイレゾリューションフォーマットによって表現出来る音世界の奥深さを痛感致しました。
ハイレゾが一時的な流行では無く、音楽制作への根幹的技術であることを大切に、録音制作を進めて行きたいと思います。
最後になりましたが受賞されました皆様、本当におめでとうございました。

〈ハイレゾリューション部門　マルチ ch サラウンド〉

（一社）日本音楽スタジオ協会
監事　清水 三義

スタジオ協会清水でございます。
ハイレゾリューション部門：マルチ ch サラウンドの作品につきまして講評させて頂きます。
まず、今年度の応募数ですが７作品の応募でした。
因に、昨年の応募は 10 作品でしたので、少し残念な思いが致します。
内訳は SACD の作品が３作品、96kHz/24bit 又は、192kHz/24bit のノンパッケージ作品が４作品でした。
楽曲のジャンルとしてはクラシック系が６作品、ジャズ系が１作品で、どれも大変こだわりの有るサラウンド作品でした。

さて、優秀賞に選ばれました沢口音楽工房代表、沢口真生さんの応募作品
Bach「The Art of Fugue（フーガの技法）BWV-1080」より「Contrapunctus 01」
演奏：UNAMAS FUGUE QUINTET
フォーマット : 192kHz/24bit　5.0ch サラウンド　WAV ファイルの作品です。
ミキシング＆マスタリング・エンジニア：沢口真生

フーガの技法はバッハ最後の曲として知られており、鍵盤楽器、弦楽四重奏、オーケストラなどで演奏されているようですが、この作品は、弦楽四重奏にコントラバスのアレンジを加えクインテットとした、世界初の演奏形態だそうです。

聴いてまず思う事は、クリアーな音質に驚きます。また、各楽器の音像が自然で音に包まれている感じを受けます。
クリアーで各楽器の音像がハッキリしていますので、フーガの特徴である 曲の主題の移り変わるさまや、それに関連する主題の連なりが、手に取るように解ります。
まさにバッハの名作を感じます。

サラウンドでは、従来の 5.0ch サラウンドに、高さ成分の 4ch を加え、より立体的な空間を意図したそうで、クインテットの生き生きとした動き、会場の響きを含む空気感と言いますか、音楽空間の表現が凄いと、素直に思いました。

沢口さんは、「サラウンド寺子屋塾」も主催され、サラウンドの研究、普及に努めておられるワールドフェイマスなエンジニア・プロデューサーでいらっしゃいます。
今回の作品は、楽曲に対するホールの選択、最新の録音システム、そして、サラウンドの定位、そのマイキングなど、沢口さんの豊富な知識と技術、経験が生かされた、大変素晴らしい、ハイレゾ・サラウンド作品です。沢口さん受賞おめでとうございます。

それでは最優秀賞作品です。日本コロムビア株式会社　毛利篤さんからの応募曲
イタリア・オペラ管弦楽・合唱名曲集より「ヴェルディ：歌劇《運命の力》より序曲」
アンドレア・バッティストーニ指揮　カルロ・フェリーチェ歌劇場管弦楽団＆合唱団
SACD 5.0ch サラウンド作品です。
マスタリング・エンジニア　毛利　篤
ミキシング・エンジニア　塩澤利安

お二人は昨年もバッティストーニ指揮 レスピーギ:交響曲《ローマの祭り》で受賞され、２年連続の最優秀賞の受賞となります。
昨年の受賞作品は、指揮者が来日して、サントリーホールでの録音でしたが、今回はイタリアのジェノバにあるカルロ・フェリーチェ歌劇場での録音です。

昨年のローマの祭りは、猛獣の咆哮のようなブラスが印象的でしたが、
この曲も、題名の運命を暗示するような、魅力的なブラスから始まります。
美しい弦の響き、なめらかな木管、重厚なブラス、と続き、思わず曲に引き込まれます。
一聴して、バランスの良さ、録音作品としての完成度の高さが分かります。
審査員 16 名の平均評価が 85 点と高得点だったのも頷けます。

この歌劇場の個性でしょうか､サントリーホール等に比べますと短い響きに感じますが、
この作品は、音に奥行きがあり、楽器の定位がハッキリしていますので、オーケストラの位置関係が良く解ります。
「歌劇場の特別席で、本場のオペラにワクワクしながら 舞台を俯瞰している」
そんな情景を思わせる、サラウンド作品です。

イタリアと言えばオペラの本場ですが、ホームでのバッティストーニ指揮、歌劇場付きオーケストラの名演奏を見事に捉えた、毛利さん、塩澤さんの技術が光る、素晴らしい作品です。二連覇おめでとうございます。

ご存知のようにサラウンドは、会場にいるような臨場感や、音楽に包まれているような空間を表現します。受賞された２作品は、その音楽性と音楽空間の表現が、特に優れています。ぜひ多くの方々に聴いて頂き、その感動をきっかけに、サラウンドファンが増える事を願いつつ、講評を終わります。

## 〈放送部門　2ch ステレオ / マルチ ch サラウンド〉

音響ジャーナリスト
株式会社マクス 代表取締役
加藤 茂樹

本年度の本部門への応募作品は次の通りとなった。
「2ch ステレオ」 17 作品　うちラジオ番組 6 作品(FM 5 AM 1)
「マルチ ch サラウンド」 7 作品

FM 放送の番組として録音された作品が多く応募されたことは頼もしい限りである。高音質メディアが条件のように考えられる録音の良さを競う場に AM が何らかの形で参加されることに大きな意味を感じるところである。FM 作品にも優れた録音が多く登場した点には音声メディアのひとつの可能性が感じられた。
ラジオ 2ch が先になってしまったが、映像と一体となった優れた作品が今回も多くあり審査員の間では議論百出であった。個人的には良い演奏素材に恵まれた番組に於いて録音が音楽の表現として深く内容とかかわるという点で、現代における録音の持つ意義と番組の完成度に貢献するところの大きいことを改めて認識した。
今一歩で残念な結果になった作品にも夫々優れた点があるなど全体の水準の高さには圧倒された。

ひとつ今回の審査で不思議なことがあった。高得点を得ていながら審査員の間から「音はいいけれどつっこみが足らない・・・」といった意味の論評が出た作品があったことだ。収録機器の性能や規格が長足の進歩をとげつつある現代、いい音は当たり前、そこで何を伝えるか作り手の感性ないしは主張があるべき・・・というのがプロ音楽録音では欠かせないところとなっている証査と理解すべきだろう。

「モノからコトへ」／ハードウェアだけでなくそれから作られる内容が重要という程の意味だが、これを今回はキーワードとして上げておくことにする。

**2ch ステレオ**

最優秀賞　毎日放送　“Dear ピアノフレンズ～親愛なるピアノ仲間たち～”より
「Daisy」澤田 かおり（Vo）服部 隆之（指揮）

本作品の優れた点は Vo の自然さと臨場感の美しさにある。ナチュラルな Vo はコントロールのきいたレベル管理で明瞭度も程良い。伴奏の深みのある音色との整合性も十分。いい録音だ。PA/ モニター系の音によるまわり込みをおさえて透明な温かさを感ずる。自然なイメージにまとめたところがいかにも TV の音声らしく好感が持てる。

**2ch ステレオ**

優秀賞　NHK 名古屋放送局 FM 番組　“ブラボー！オーケストラ”より
「サン＝サーンス作曲 バイオリン協奏曲第３番ロ短調作品 61 より第３楽章」
ティエリー・フィッシャー：指揮　三浦 文彰：バイオリン
名古屋フィルハーモニー交響楽団

まず、オーケストラのスケール感に注目する。対応するバイオリンの分離の良い音像と近接収音したかと思われるシャープな音色が録音の巧みさを強調する。分離と鮮明な音像という仕上がりは伝送系とリスナーの聴取環境を考えると必然であろう。自然で豊かな臨場感がさわやかだ。

**マルチ ch サラウンド**

最優秀賞　長野朝日放送　HDTV　5.0ch
“2014 サイトウ・キネン・フェスティバル松本”より
「ベルリオーズ：幻想交響曲 第４楽章 断頭台への行進」
小澤 征爾 指揮　サイトウ・キネン・オーケストラ

長野朝日放送らしい明解さと充実したオーケストラの音圧を十分に収録し表現されている。同局といえば高音質録音で毎回期待されるところが大きいが、サイトウ・キネン・オーケストラのサウンドを理解しつくしたところから生まれてくる整然とした分離と、レンジの広さを感じるダイナミズム ff での急峻な立ち上がり、pp の高音域、トータルのスケールはサラウンドプログラムの好素材であり、小澤（指揮）サイトウキネン Orch のこだわりと録音技術のこだわりが一体と成った圧倒的高音質を前提とした表現といえる。

**マルチ ch サラウンド**

優秀賞　NHK　HDTV　5.1ch
“プレミアムシアター / 二期会公演 歌劇「魔笛」モーツァルト作曲”より
「第１幕 第８曲 フィナーレ：「早く行きましょう、勇気を出しましょう」～
「ザラストロ、万歳！」

デニス・ラッセル・デーヴィス：指揮、宮本亜門：演出
妻屋秀和、鈴木准、森谷真理、他 読売日本交響楽団

東京文化会館に於ける公演を収録した作品。スケール感の表現にサラウンドは良く馴染み臨場感だけでなく迫力を伝える。ステージでの出演者群の歌やセリフを明解なバランスでとらえ映像との整合性を計り、音楽的にも演技として見たパフォーマンスもスケール感のある音場として伝えている。

オーケストラピット内の収音も的確。ステージ上の出演者の声の収音再現には聞くべきところが多い。効果音に関してはいろいろな意見も出たが、TV の視聴環境のことを考えるとよいバランスであったと思う。

難易度の高いいくつもの問題を克服して作品を音楽的にまとめた技術と博識に敬意を表する。

## 〈ベストパフォーマー賞〉

（一社）演奏家権利処理合同機構
MPN
理事長　椎名 和夫

講評ということですけれど、いま音を聴いていただきましたよね、それで十分だと思っています。ここで細かいことをあーだこーだ申し上げるつもりはありません。今たまたま、レコーディングのエンジニアをされた内藤さんと隣同士の席に座っておりまして、色々とエピソードをうかがっていたんですが、金管などは女子の方がよほどピッチも良く、リズムも良く、全く問題ないんだというお話でした。今日のパンフレットの 20 ページに彼女たちの集合写真がありますが、おそらくこの前の方にいる 3 列、約 46 人くらいの方たちがいうなれば 1 軍の方たちで、それを上回る数の方たちが 2 軍としてその後ろに控えているということなんですかね。部員は全部で 100 人くらいだそうですけれど、この真ん中にいる白い服を着ているのが先生で、この先生がまた非常にスパルタなんだそうで、ミスをすればあっさり 1 軍から 2 軍に落ちたり、そこを埋める形で 2 軍から 1 軍にはい上がってきたり、というようなことを 1 年 365 日繰り返しながらああいう音を作っていくのだそうです。まあどれだけ濃密な高校生活を過ごしたのだろうなと想像すると、とても羨ましくなります。こういう経験をした人たちが、ある人は音大に行って音楽の道に進まれるということもあるでしょうし、ある人はそのまま地元で結婚されて音楽から遠ざかっていくということもあるかもしれません。けれど、これだけの経験をした人たちが 100 人いて、これからの日本の音楽というものを色々な形で支えていく存在になっていくと思いますので、そのことがとてもかけがえのないことだと思うし、ありがたいことだなあと思います。そういう意味も込めまして、今回ベストパフォーマーに選定させていただきました。

唯一の不満として、今日はてっきり熱血ブラバン少女に会えると思って来たのですけれど、どこにもいらっしゃいませんね。どうも授賞式への参加は難しかったそうで、いろんな事情があるやに聞いていますが、学校が CD を出して、学校が受賞するという非常に特異なケースですから、無理からぬ面もあるかもしれません。それはさておき、本当にすばらしい演奏を聴かせていただくことができて、心からうれしく思っています。

精華女子高等学校吹奏楽部のみなさん、ベストパフォーマー賞の受賞、おめでとうございました。

〈新人賞〉

（一社）日本音楽スタジオ協会
会長　内沼 映二

新人賞は今年で４回目になります。例年２名ずつ選出していましたが、今年は相澤君１人となりました。今回35才以下のエンジニアが数人いましたが賞には今一歩ということで、今年は１名にさせていただきました。

講評ですが、相澤君は、実は今聴いた音楽ではなく、映画、テレビ、アニメなどの劇伴が非常に上手いんです。スケジュールも何か月も先まで取れないくらい、売れっ子になっているエンジニアです。実は数年前に劇伴の作品でエントリーしたことがあるのですけど、私はすごく良かったと思っていました。実は今回そういったものが聴きたかったかなという気持ちもありますが、今回のこの作品は、ドラマ、アニメ、映画などの映像の音楽、劇伴を中心として活躍している澤野さんのアルバムで、聴いていただければわかると思いますが、相澤君も受賞コメントで、参加されたミュージシャンやVocalの演奏・表現が非常に力強くエモーショナルで、その感情も含めそのまま生かせるように、「ボーカルに負けないオケ、オケに負けないボーカルのバランス」を意識したサウンド創りと書いてありますけれど、サビなどは完全にロックサウンドで、普通CDでは、ロック系の場合最初からガバン！というアップアップの音がありますが、そこはダイナミックレンジを意識した創りをしていて、非常に好感が持てました。常に生音を録っているエンジニアなので、ジャンルに関係なく、もっと良い音創りに精進していただければと思っています。非常に期待をしているエンジニアの一人です。

# 「音の日のつどいパーティー」レポート

平成 27 年 12 月 4 日（金）「音の日」記念イベントとして、18:00 より目黒雅叙園 4 F「花苑」に於いて、当協会および一般社団法人日本オーディオ協会、日本ミキサー協会、一般社団法人日本レコード協会、一般社団法人演奏家権利処理合同機構 MPN の共催により、第 22 回日本プロ音楽録音賞授賞式関係者と当日併行して開催された 一般社団法人日本オーディオ協会主催の「音の匠顕彰式」および「学生の制作する音楽録音作品コンテスト」関係者が参加した「音の日のつどいパーティー」が開催された。

当日の模様を以下にレポートさせていただきます。

（一社）日本オーディオ協会
校條 亮治会長

経済産業省 文化情報関連産業課
課長補佐 伊藤 桂 氏

日本プロ音楽録音賞授賞式の司会に続き、進行役は石井 みゆき氏が務め、最初に一般社団法人日本オーディオ協会 会長・校條 亮二氏より来場者に対して開会の辞が述べられ、続いて来賓代表として経済産業省 商務情報政策局 文化情報関連産業課課長補佐 伊藤　桂氏が挨拶された後、音の日実行委員長の森 芳久氏より、本年度の「音の匠」として顕彰された内容が以下の通り紹介された。

平成 27 年度 第 20 回「音の匠」は、生体の分泌する代表的なタンパク質としてクモの糸の物理化学的研究に長年取り組み、多くの著書や論文を発表され、実現化に向けてクモの糸の機能性を明らかにするために、クモの糸でヴァイオリン用の弦を作成された、奈良県立医科大学 名誉教授の大﨑　茂芳氏が「音の匠」として顕彰されました。

「音の匠」受賞者
大﨑 茂芳 氏

続いて、第 22 回日本プロ音楽録音賞に於いて表彰された各部門の受賞者を代表して、最優秀賞に選定された代表エンジニア 6 名、ベストパフォーマー賞 1 組、新人賞 1 名および審査員特別賞 1 名が紹介された後、エンジニアを代表して、（株）カメラータ・トウキョウ 髙島　靖久氏、公益財団法人国際科学振興財団 大橋力氏が挨拶を述べられた。

ＣＤ部門「クラシック、ジャズ、フュージョン」
　　内沼　映二 氏　　（株）ミキサーズラボ
ＣＤ部門「ポップス、歌謡曲」
　　高桑　秋朝 氏　　（株）JVC・ケンウッドビクターエンタテインメント
ハイレゾリューション部門「2ch ステレオ」
　　髙島　靖久 氏　　（株）カメラータ・トウキョウ
ハイレゾリューション部門「マルチ ch サラウンド 」
　　毛利　篤 氏　　日本コロムビア（株）
放送部門「2ch ステレオ」
　　田中　聖二 氏　　（株）毎日放送

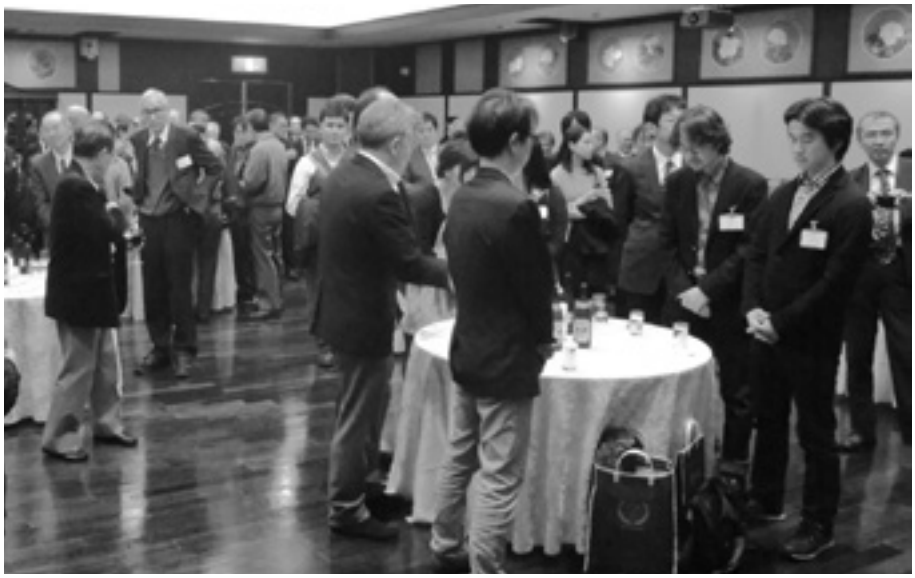
放送部門「マルチ ch サラウンド」
　　岩井　和久 氏　　長野朝日放送（株）
ベストパフォーマー賞
　　精華女子高等学校吹奏楽部
新人賞
　　相澤　光紀 氏　　（同）SIGN SOUND
審査員特別賞
　　大橋　力　氏　　（公社）国際科学振興財団

（一社）日本レコード協会
畑 陽一郎 氏

大橋　力氏の挨拶の後、一般社団法人 日本レコード協会 理事 畑　陽一郎氏による乾杯の発声が行われ、歓談タイムとなる。会場内では受賞者を取り囲んでの写真撮影や談笑する場面が見受けられ、今年も様々な音のプロフェッショナルな方々が一同に会する場となりました。またパーティーの途中で第二回「学生の制作する音楽録音作品コンテスト」の受賞者が紹介され、最後に中締めの時間となり、当協会会長・内沼　映二より、参加者に対して御礼の挨拶が述べられた。

内沼 会長

今回もプロ音楽録音賞の運営委員会および審査委員の皆様をはじめ、多くの関係者のご協力により、第22回目を無事に終了することが出来ました。有難うございました。



# 会　員　動　向

1．会員数（平成 28 年 1 月 1 日現在）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 正会員（法人） | 25 法人 | 準会員 | 2 法人 |
| 正会員（個人） | 18 人 | | |
| 賛助会員Ⅰ | 42 法人 | 賛助会員Ⅱ | 2 法人 |

2．入会

①賛助会員

○株式会社 静科　平成 27 年 6 月 1 日

○国際アート＆デザイン専門学校　平成 28 年 4 月 1 日

3．退会

①法人正会員

○株式会社サウンドバレイ　平成 27 年 7 月 31 日

②個人正会員

○境澤　賢治　平成 27 年 6 月 30 日

4．法人・会員代表者および住所変更、その他

①正会員

○役職変更

株式会社 音響ハウス

高根　護康（専務取締役）

○代表取締役変更

株式会社 東急文化村

（旧）升田　高寛

（新）西村　友伸

②賛助会員

○学校長変更

キャットミュージックカレッジ専門学校

（旧）美根　宏史

（新）井原　延治（ｲﾊﾗ ｴﾝｼﾞ）

○学校長変更

ビジュアルアーツ専門学校大阪

（旧）百々　俊二

（新）村中　　修

○法人名変更

（旧）日東紡音響エンジニアリング（株）

（新）日本音響エンジニアリング（株）

電話番号、住所等の変更はありません。

○会員代表者変更

株式会社ステレオサウンド

（旧）野上　正生

（新）鈴木　敏明（総務部 副部長）
○住所変更
スチューダー・ジャパンーブロードキャスト株式会社
〒 108-0022 港区海岸 3-3-8 安田芝浦 8 号館ビル 5F
TEL：03-5730-0780　FAX：03-5730-0781
（2015/9/28 より）

5．その他
○担当者変更
経済産業省商務情報政策局文化情報関連産業課
（旧）望月　孝洋 課長補佐
（新）伊藤　桂（ｲﾄｳ ｹｲ）課長補佐
○代表取締役変更
（株）ポニーキャニオン
（旧）桐畑　敏春（取締役相談役へ）
（新）吉村　隆（昇任）
○取締役変更
（株）エス・シー・アライアンス
松木　哲志（代表取締役会長）
山中　洋一（代表取締役社長）
○代表取締役社長変更
日本コロムビア（株）
（旧）原　　康晴（取締役副会長へ）
（新）吉田　眞市
○代表取締役社長変更
（株）ヤマハミュージックコミュニケーションズ
（旧）古田　耕一
（新）萩野　伸之
○理事長・事務局長変更
（一社）私的録音補償金管理協会
渡邊　　誠（理事長）
小林　則夫（事務局長）
○事務局長・住所変更
（一社）日本アド・コンテンツ制作者連盟
（旧）杉本　　誠
（新）広川　雅典
〒 105-0004 港区新橋 2-13-5-3F
（フロアー移動）
○本社新築移転
（株）サウンドクルー
〒 143-0006 大田区平和島 5-10
TEL：03-5764-1115　FAX：03-5764-1116
○会長変更
（一社）日本エレクトロニクスショー協会
（旧）山本　正己

（新）水嶋　繁光（シャープ（株）代表取締役）
○理事長変更
（一社）日本音楽制作者連盟
（旧）大石　征裕
（新）門池　三則（（株）バッド・ミュージック）
○会社合併
（旧）（株）oricon ME、オリコン･エンタテインメント（株）、ORICON NEXT（株）
（新）（株）oricon ME
代表取締役社長 原田　健明
○事務所移転
（株）キョードー東京
〒 107-0062 港区南青山 5-2-1　NBF アライアンス 4F
TEL：03-3407-8131（代表）　FAX：03-3407-3427（代表）
○役員変更
Dts Japan 株式会社
代表取締役社長　Brian Towne
代表取締役　　黒川　剣
○理事長変更
公益財団法人日本演奏連盟
（新）堤　剛
○事務所移転
特定非営利活動法人 日本映像美術協議会
〒 151-0053 渋谷区代々木 3-43-5 ジュネス代々木 102
TEL：03-5350-4027　FAX：03-5350-4036（TEL&FAX 変更なし）

## ♪　編　集　後　記　♪

「リーダーには勝利もなければ失敗もない、有るのは一喜一憂を抑えての前進のみ」だそうです。本年もよろしくお願い申し上げます。

Smith

昨年は、目と下半身にガタが来て、大変な一年でしたが、今年は頭にこれ以上ガタが来ないように気を付けて頑張りたいと考えています。

hair ken short

新年明けましておめでとうございます。今年は出来るだけ、あちこちを飛び回りたいと思っています。今年もよろしくお願いします。

yakiton

明けましておめでとうございます。気持ちを新たに積み重ねと挑戦を続けていきたいです。本年も宜しくお願い申し上げます。

mm

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊運　営　委　員　会＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

委 員 長　清水　三義（青葉台スタジオ）
委　　員　佐藤　賢一（事務局）
〃　　山本　薫　（　〃　）
〃　　伊東　真奈美（　〃　）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【発行人】 会　長　　内　沼　映　二　　【発　行】 2016年（平成28年）1月
【発行所】 一般社団法人　日本音楽スタジオ協会
〒169-0072 東京都新宿区大久保2丁目1番11号　モナーク大久保3F
TEL. 03－3200－3650　　FAX. 03－3200－3660
http://www.japrs.or.jp　　E-mail:japrs@japrs.or.jp
【編　集】 総　務　委　員　会　　【印刷所】 株式会社研恒社

JAPRS

Japan Association of Professional Recording Studios
http://www.japrs.or.jp E-mail:japrs@japrs.or.jp